世界婦人

●本紙は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

懷疑厭世の時代

世間では、今日の時代は實に懷疑の時代だと唱へて居る、併し、懷疑と言ふとは、何れの時代にも存する事實で、必ずしも今日に限られた現象では無い、又、今日の社會組織が惡い爲に起つた現象で無いとも勿論である、又、懷疑が必ず人を引いて厭世に赴かすとも限られては居ない、懷疑は人の智識が或る程度に進んだ時に始めて起る所の、避くべからざる現象である、そして此懷疑の時期に達した人が、其境遇や性質に因りて厭世に陷るのも亦事實である、懷疑は人生必至の經路であるが、厭世は一の弊風であると言ふて差支は無からう。

此頃の厭世的風潮は實に眼も當てられない程の悲絶痛絶の狀を現はして居る、今日の如く自殺者の多さと、是れ前代未聞であるとは屢々古老の口より叫ばるゝ所であるが、或は其言ふ通りであらうと思はれる、又、「其然である」と答ふべき事實も確かに存在するのである。

此頃の自殺は多くは色の戀だと言ふ樣な艶めかしい情實を通り越して居る、例へば落花狼藉と言ふ樣な華美な光景を去りて、秋風蕭殺たる深い淋しい趣を添へて來た、素より「戀」や「貧」の原因が無くなつた譯では無いが、「厭世」といふ思想「諸行無常」てふ觀念が深く強く彼等を支配する樣になつたのである、是は吾等の深く注意すべき現象ではあるまいか。

殊に此自殺が青年男女に多い、殊に女子に多い、又、殊に多少智識に富める人の中に多い樣である、そして其原因が『戀』とか「貧」とか言ふ有形なるものから一歩を進めて觀念界に存して居る點に注意せねばならぬ、抑も青年は最も春秋に富で居る、從つて最も希望に富で居る、處が、其豊富盛烈なる希望が一朝にして泡沫と消え去つたならドウであらうか、彼等の悲歎は幾何であらうか、彼等は實に黑暗々たる荊棘の谷底に投せられた樣な心地がするであらう恰も巨萬の富を有せしものが一朝にして無一物の乞食に零落したと同樣で、彼等が親しき親兄弟を棄てゝまで死を決するに至るも無理は無いのである。

思ふに彼等は決して貧しきが故に、又、其戀を得ざるが故に死を決したのでは無い彼等の智識は彼等の爲に懷疑の眼を開いて現代の社會を見せしめた、そして之を穿鑿し之を批評せしめた、然るに社會の何れの一隅を開いて見ても、惡魔の跋扈跳梁は實に恐るべき光景を呈して居る、始め懷疑の眼を開いた彼等は、此の恐ろしき現象に接するや、其美しき心臟にさき強き最初の打擊を加へられたのである、冷靜なる智識の働きは熱烈なる感情を刺激して來たのである、頭腦の力は心臟の力を惹起すに至つたのである、彼等は先づ驚いたのである。

社會の現狀、餘りに日に非なるを見たる彼等は、更に一歩を進めて人生其ものをも疑ふに至つた、「人生とは何ぞや？」「人生果して何等の價値をか存す？」「生や、死や、果して何等の意義を存するか？」彼等の懷疑は斯の如き題目を辿りて進み行く、而して其結論は、或は「不可解」となり、或は「人生無常」となる、「不可解」と言ひ「無常」と言ふも、其語は共に宗教に響く晩鐘の如く彼等に聞ゆるのである。

彼等が冷靜なる懷疑は一轉して熱烈なる厭世となつた、其頭腦と心臟とは、協力して彼等の全心全身を支配するに至つた、單純無垢なる彼等は思慮分別を用ゐずして一向に其指揮に從て進み行く、而して自殺は實に其究極なのである、自殺は實に彼等が論理の終局である、彼等が心情の滿足である、素より其論理の出發點が誤れるや否やは別問題であるが。

「厭世」は不自然なる社會の特產物である太古の社會は自然的に組成せられて、個人と社會と自然とは一致の方針に向つて進んで居た、此時代に於ても「懷疑」てふ事實は存したであらうが、「厭世」てふ現象は未だ起らなかつたらしい、然るに社會の進化が漸く進んで、或る家族或る階級が自己の利害の爲に社會制度を組織するに至り、自然的血族的組織が轉じて政治的階級的組織となるや、茲に始めて「厭世」思潮が熾んに起つて來た、猶太に於ける耶蘇の時代、印度に於ける釋迦の時代は實に其極點に達した時であらう。

厭世と言へば甚だ消極的に聞ゆるが、之を積極的意義に解すれば實に世界の彈劾である、之を社會的現象として見れば、厭世は消極的の革命で、革命は積極的の厭世である、唯だ所謂革命に於ては其對象が現世社會にのみ限局せられ、厭世と言へば人生其ものゝ奧義にまで彈劾の刄を突入る、點に於て相違がある、併し其「世界の彈劾」てふ點に於ては同一で、從て厭世の時代は、即ち革命の時代であるとが明瞭に分る。

基督や釋迦の生れた時代は、共に階級組織の弊害が最極に達せし時代であつた、厭世家の多い、革命思想の盛んな時代であつた、そして基督と釋迦とは時代の精神を代表したる、時代の要求に最も能く應じたる最も傑出した人物であつた、さて翻て今日の社會は如何であらう、經濟的階級制度の弊害は實に其極點に達したと言はねばならぬ、毎日の悲慘なる新聞記事は之を證明して餘りある事である。

懷疑は思想發展の階梯である、社會進步の一原因である、而して厭世は不自然なる社會の惡弊で、懷疑の苦悶に於ける弱者の運命である、然り、厭世自殺發生の經路は此の如く明白である、されば吾等は、徒らに驚き悲しむに及ばない、社會發展の行路に於ける一現象として之を觀ずれば、此間に自ら光明がある、けれど惡弊はドコまでも惡弊である、之を救濟するの方法抑も如何、如かず、彼等をして現代の社會の如何にして成立し來りしかを知らしめよ、彼等をして將來の社會の如何に發展すべきかを知らしめよ、而して人生の意義をして彼等の前に明白ならしめよ、時間上、空間上、に於ける彼等の立地を了解せしめよ、而して彼等の前に開かれたる永遠無窮の大道を悟らしめよ、彼等をして懷疑の半途に於て敗北者たらしむる勿れ、是れ厭世時代に於ける先導者の急務也。

還鄉錄

南部阿南無十讀人

（一）

◎疲ひに疲れたる時、人は我がホームに歸りて息ふ、ホームは人生の最上安息所なり、ホームに還れ、ホームに還れ、永遠の光明を照らし、無限の平和を湛ふる、汝自身のホームに還れ。

◎「神の國は爾曹の裏にあり」汝の裏に汝が眞のホームあり、此ホームは是れ汝の天地なり、汝の世界なり、汝の生命なり、汝の光明なり、神コゝに降臨す、自然の眞面目コゝに開展す、此を棄てゝ何處に行かん。

◎法律や、習慣や、道德や、科學や、皆是れ汝が自由を羈束するものに非ざるは無し、汝の自由は唯だ汝自身のホームにあり、汝自身のホームに天地の法則を存す、人生の眞理を存す、淸き汝のホーム還れ。

（二）

◎一切の羈束を斷滅衝却して以て汝の裏に還る、是れ虛無主義也、革命の叫びは是れ此虛無界に於ける汝のホームより來る、蓋し此ホームは實に萬有の基礎なり、萬象の本源なり、革命も亦此より起る也。

◎世に革命を呼ぶ者あり、されど「革命に來れ」と叫ばんよりは、寧ろ「汝自身に還れ」と言ふの更に捷徑にして且つ切實深刻なるを知らずや、總ての革命史が虛無主義的內書より開幕せるもの所以ある哉。

（三）

◎人多くは言ふ、革命は不平より來ると、是だ皮相の見のみ、歷史の實相を知らざるの言のみ、見よ、古來幾多の革命家が身を生死の間に投じ、刻苦辛酸具に嘗めて悔まざるは、實に彼等の上に人生最上のホームありて常に此に安息せるが故に非ずや。

◎革命は暗黑裡に起る、されど此暗黑裡に於て自ら光明の輝ける無くんば、何ぞ革命の元氣を此間に奮興するを得ん、古來の革命家が百折して而も屈せざる所以のものは、實に彼等のホームに久遠の光明皎々として輝けるが故に非ずや。

◎されば此ホームは革命戰士の休息所なり、而も同時に革命戰爭の發源所たるを否定すべからず、故に永き戰爭を戰はんと願するものは、常に此の永久のホームを守て、七顚八倒して尙ほ苦中有樂の境に在るを得。

（四）

◎鄕に還れ、鄕に還れ、戀しき鄕に還れ、人死して皆此鄕に還る、生きて常に此鄕に在るものは其だ稀なり、蓋し世に厭世の人多き所以なり。抑も人生は革命なり、革命は人生發展の無限の階段なり、ホームは人生永久の樂園なり、人多く革命の悽慘を見てホームの靜樂を見ず、厭世の人多き所以なり。

◎常にホームに在りて、常に革命の人生を歩づ、歡樂其中にあり、光明其中にあり、希望其中にあり、而して人生の意義、始めて解すべきに非ずや。

◎久々にて故鄕に歸り、コゝに此還鄕錄を記す。

●女子大に讀むく男子盛んに讀まざる可からず

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

海内時事

○糸屋の工女虐待

信州或は上州の製糸家が女工を虐待すると は吾等の屢々耳にする所なるが去月十二日 東都新聞紙上にて又も前橋の工女虐待事件 を知れり、報導に曰く

▼前橋警察署にては昨今市内製糸家中に雇工女を虐待するものありとの事を耳にし主任巡査をして實地に視察せしめたるが工女虐待の怪聞は多く坐繰製糸家の間に在り。

▼今回の臨檢にて最も主任巡査を驚かしたるは市内國領八十七番地北澤市松が工場なり同人の工女を虐待することは有名のものにて地方にては同家に仕込まんとする者唯だの一人もなきより同人は雇人口入業者の手を借らず自身新潟富山の遠方に出張して甘言出稼人を募り些少の手附金を以つて直ぐ前橋へ連れ來り有無を云はせず苛酷に使役するものなり。

▼目下同家に使役せらるゝ五十三名の製糸工女は養豚の飼料の如き食事を與へられて長時間の勞働をなす爲め營養不良に陷りて顏色いづれも憔悴し一見この世の人とは思はれず寢具の如きは五十三人に對して極寒の時と雖も煎餅の如き三布四布蒲團取交せて六十枚を給するのみ昨今の盛夏となりても一張の蚊帳をも使用せしめず同家の妻女イツ(三十)は臨檢巡査の詰問に對して手前方には蚊が居りませんと答へたるも現在主人の寢室に蚊帳もありその釣手もあるより馬鹿を云ふなこれは如何にと突ツ込まれて漸く恐入りたる程なりき。

▼同家の就業時間は午前四時より午後八時頃までなれば工女等は殆んど綿の如くに疲勞し枕に就くと同時に熟睡するゆゑ蚊軍の襲擊もその夢を破る能はざる有樣なりとの一事を聞くも如何に其雇主が殘酷なるかを察するに足らん

▼之に次で殘忍の雇主は細ケ澤町廿六番地根井白なる者なり同家は目下八名の女工を使役し居り朝は午前三時過ぐる頃に起床せしめて五時前に下等外國米と挽割麥とを等分に混和したる飯と大根の切干を刻み入れたる汁を與へ晝は月に一兩回鰊の煮付を與ふることあれど多くは大根切干を鹽辛く煮附けたるを小皿に盛りて與ふるのみ夕飯の惣菜は大根の澤庵漬や梅干の一二個を添ゆるのみなれば此處の女工等も亦た營養不良にて妙齡の少女とは思はれず而かも勝手と部屋の間にある便所に盛んに臭氣を放ち工場には腐敗したる蛹散亂して蛆を生じその傍には汚穢極まる工女の寢具を積重ねあり衛生も何もあつたものにあらず

▼以上の事實は單に同市工場の一部に存するものなれば尙は此の如き事實は同市内に多く發見せらるべき見込にて警察署は引續き巡視を行ふ筈なりと

▼吾等は屢々かゝる事實を耳にするとなれば今更に驚き申さず候、今日の如く資本の私有をなし勞働の横領を許し營利的自由競爭を成功の秘訣とする社會に於ては警察の說諭を百萬遍重ぬるとも此の如き事實は消滅せざるべく候、吾等は雇主等の殘忍を惡むものに候、されどかゝる殘忍の所爲に出でざれば營業を繼續する能はざる如き社會制度を更に深く惡むものに候

○怠納税十四萬圓

之を聞く、羅馬政府が軍國の基礎を樹てゝ武威四隣に輝やくや、帝國政府は全然一個の惡税徴收機關となり了し、人民が政府に對する信用は地を拂て消却し、脫税は人民の正義なりと解せらるゝに至れりと、吾等今、夫の膨脹の極に達して而も滅亡の淵に瀕せし古羅馬大帝國の運命を追想して、日本の現狀に連想せんか、眞とに心を寒して日本同胞の前途を望まざるを得ず候、然る所、去月廿日頃の國民新聞は栃木縣に於ける町村税怠納の事實を報じて曰く

栃木縣は東京附近にて最も怠納税者多き土地柄なるは收税官の久しく憂ふる處なるが年々增加する傾きあるのみにて減少し得ざる事は當局者が之まで納税義務者の精神的改善を待ち少しも人工的改良を爲さゞりしにも依るものなるを思ひ昨年來改良方法に就て研究せし結果一方に於いては怠納者無く又たは少なき町村長を奬勵するの意味にて表彰し他方に於ては不整理の町村を極力改善せしむるに決し本年六月上旬より吏員を派して成績優等なる町村と不成績なるとを區分し調査せしめ優等者の分は已に終了したれば不整理の分に付一層整理をなさしめをるが目下表彰すべく內定せる町村長は栃木縣下に十名內外あり

殊更に調査して表彰せんと欲せしに、數百村中僅かに十名を得たるのみとは實に驚くの外無之、是れ實に怠納町村の多きを表示するものに候、而して國民紙は更に曰く

△而して怠納税者の多き影響として自治體の紊亂を招き甚しき町村は小學校敎員の給料をさへ五六ケ月も拂ひ得ざるあり、之等町村税の怠納勝なるは一には役場當事者の信用問題に原因するは勿論なるべきも人民が町村税を輕視するの惡習慣に存するは疑ふべくもあらず

而して四十一年度に於ける怠納總額は實に十三萬一千七百廿二圓の高額に達せり是れ僅かに一縣內に於ける町村税一種に就ての調査に過ぎず候、若し日本全國の直接國税其他地方税に就て調査せば其幾何に達すべきか測り知るべからず候、怠納は實に國民が政府に對する第一の彈劾なり、世人は彼の赤色旗事件などに驚けども、此「大なる叛逆」には注意致さず候、然れども國家並びに政府より見れば此「叛逆」は一層恐るべき現象に候。

○古河家と高崎聯隊

資本家制度發達して資本家の勢力強大となるや彼等は勞働者壓制の手段として必ず軍隊を使用するに至るべしとは吾等の屢々論せし所なるが去る十二日の國民新聞は實に其論據と見べき一事實を報導したり曰く

足尾銅山暴動事件の際高崎步兵第十五聯隊には陸軍大臣の命に依て同地に出兵し暴動を鎭撫したるが古河鑛業會社は今回高崎聯隊の爲めに軍事用公會堂を高崎市に建設し以て敬意を表したしとて代表者木村長七氏の名を以て其建設資金九千圓を同市役所に寄附せんことを出願したれば小澤同市長は一昨日午後の市會に之を提出し全會一致にて受入るゝことゝなりたるが多分向ふ一ケ年間に建設工事を終り直ちに高崎聯隊に寄附すべしと

寔さに宇都宮新師團の爲に五萬圓を寄附したる古河は今や此擧に出づ、社會の形勢を察し他日の危急に備へんとする同家の鋭敏なる施策には吾等今更に驚くの外無之候

○内閣の更迭

二年有餘の間繼續せる西園寺內閣亡びて武斷政治の桂內閣は再び成立致し候、先きに日本國民が非常なる憤激を以て打ち倒せし桂內閣が幾時ならずして再成立せしを見て日本國民の健忘性を憫れる向も有之やに承り候、然れども日本現時の社會に於て國民の意見を有力に發表せんと欲せば彼の過般の日比谷騷動事件の如き擧に出でざるを得ざるべく從て不平ながらも多くは忍び居る次第に候、國民が健忘性なりなどと申すは舊き常套語を繰返すものにして何等の意義も無之候、日本人民の意向が一分半厘たりとも內閣組織に關して直接に參與せしめられしとは曾て無之事にして、日本は未だ決して立憲國とは申されず、況して平民國民主國に非ざるは言を待たず、從て人民の意向が國家の政治の上に少しも力無きは明かに候、明治維新、國會開設によりて日本が立憲的自由國となれりと言ふ如きは甚しき妄想にして現代の日本は實に君主專制官僚政治の頂上に達し極美を現はせしものに候今回の新內閣組織に關して勅使は國內人民の意向などに思ひを懸けずして却て外國にある伊藤博文氏に之を諮られ候、其他は例に二三元老を訪ふて相談せられ、而して內閣組織の大命は桂氏に下り候、政黨や國會の意向などは第二第三の問題に候、況して一般人民の意向の如きが一分半厘のキヽメも無きは素より怪しむに足らず候

○東北評論の再興

寔さに上州高崎より發行せる『東北評論』は其第一號を發行するや、直ちに其筋の嚴命によりて禁止せられしが、今回、遠藤友四郎、高畠素之、神田幸策、長加部寅吉諸氏の盡力によりて新たに政治雜誌として屆け出で、去八月一日より第二號を發行するの運びに至れり、吾等は切に諸氏の御健鬪を祈るものなり。

○長谷川辰之助氏消息 ●●●●●●● 二葉亭四迷氏より本社の福田等に宛てたる一葉の繪端書來る、中に曰く『バイカル湖畔より御機嫌を伺ひます七月五日』と希くは舟車安穩、心身壯健にして旅行を完ふせられんことを

○西川文子氏の歸國 ●●●●●● 屢々本誌上に流麗なる美文を寄せられたる西川光二郎氏夫人ふみ子氏は彼の電車事件の裁判にて良人の入獄せられし爲め、去る二十三日夜新橋を發し、鄕里美濃國安八郡外野村なる實兄志知善友氏宅に赴かれたり、尙は明後年七月良人の出獄迄同地に在て靜養の心算なる由

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

◉氷蘭土婦人の覺醒

氷蘭土の丁年婦人が其大多數の一致を以て、充分なる投票權を賦與せられんことを當期議會に請願せりとの事を聞かば、何れの國民と雖も、一驚を喫せざる能はざるべし。彼等は既に市政の上に投票權を有せり、男子或は女子の何れを問はず、又、何れの國に於ける如何なる問題を問はず、其大多數を以て請願を爲せし例は歴史上に未曾有なり、故に吾等が屢々聞く所の『婦人の大多數にして參政權の要求を爲さば、彼等は必ずや之を獲得すべし』てふ語は女權反對者が婉曲なる皮肉語として屢せらるゝを常とす、然るに氷蘭土婦人は實に其大多數を以て之を要求したるなり。

氷蘭土人が恰倒にして能く法律を守ると他に其儔なし、彼等の中には犯罪といふもの存て存せず、彼等が獨立の精神は、嘗者丁抹國王が同島に偉大なる旅行をなせし際に能く發揮せられたり農民等は家の戶口より其行列を見る事ありしも、路傍に出でゝまで之を見物せんとはせず、又、畑にゐるものは其畑を棄てゝまで之に近寄らんとは爲ざりき。

國會の會場にして、同島政治上の古來の中心たるシングヴオルドに貴賓の到着するや數百の氷蘭土人は此に出會す、彼等の中には其血統を遡りてオーチンを祖先とする者あり、又、ノールエー及びスエーデンの有史以前の帝王を祖先とする者あり、彼等は敢て默し、恰も木像の如く直立せり、而して其時、王が耳にせる彼等の談話中に曰く、

「是れ古來、吾等が祖先の神聖なる集會所なり、其の如き偉業は、神と火との外に決して之を爲す者無し、會堂の床は即ち硬き火成石を以て造られ、雪を冠れる尖れる山は即ち其圓柱を成し、其天井は即ち彼の蒼き蒼穹なり、高くして貴き大氣は實に其威儀を作す、此に氷蘭土の山風は吾人の魁を吹き、此に氷蘭土人は身を直立することを學び、此に吾等が祖先を自由にし有名にしたる法律は造られ、又之を採用せらる此に氷蘭人の生命の花は開く。」

夫れ然り、此の氣品高き自負心厚き種族の婦人が、今や公事に關する權能を要求するに至りしは、怪しむに足らざるべし。

◉英國女學生の光榮ある成功

一九〇八年六月は英國婦人の爲に紀念すべき時となりぬ、蓋し彼の婦人參政大運動を正當ならしむるの事實起りたれば也、即ちニユーンハムのグレアー、スピールマン二嬢は、ケムブリツヂ大學經濟科の學位試驗に於て、第二部の全男生を打破して之に勝ち、ニユージランド總督の令嬢リーツス嬢は、同大學倫理科學位試驗に於て、昨年同樣の成功を再びしたり、（昨年は其第一部全男生を打破して之に勝てり）彼女は今年其第二部に於て最高の點を得たるものにして、彼女に次で其競爭地點に進めるもの僅かに一男生ありしのみなりき。

リーヅス嬢は熱烈なる社會主義者にして大學フアビアン協會創立者の一人なり。

此他ギルトンのマルヂヨリ●ロング嬢は數學科學位試驗に於ける競爭者中に入り、ニユーンハムのカメロン嬢は第十位を占めワーレン●ジヨーンス嬢は第二十位を取り而して三嬢とも一等賞を受領したり、借問す、女子の智識力其他の能力が、到底男子に及ばずとせる者は、此事實を聞きて如何の面目か之あるべき？。

◉佛國女權擴張運動

佛國に於ても女子解放運動は急速に發達しつゝあり、而して巴里に於ける一婦人團體は此頃英國の婦人運動の戰鬪方法を採用し始めたり、五月の初め巴里市會議員の選舉あるや、此婦人團體はラレエといふ婦人を其團體の候補者となせり、ラレエは學校教員にして婦人運動の熱心なる首領なり、彼女は其男子の競爭者が三千二百票を得たるに對して九百八十二票を取得し、而して其候補運動は佛國に於ける婦人運動の標木を成せり、佛國に於て、婦人が一代表議會に於ける一位子の爲に候へるは實に之を以て嚆矢となす。

●土耳古の革命亂

革命の熱氣は今や世界各國に瀰漫せんとするもの、如し、而して其革命の終局は目下東洋に於て烈しく漲り居り候、吾等は先づ土耳古の亂より見るべし、去月十五日の外電報に曰く、

△土耳其軍隊騷亂　マセドニアに於ける土耳其各軍隊の間に叛亂の兆あり、モナスー軍の指揮官シエムシパシヤが一將校の爲めに暗殺せられたるも其の一例なるが、コンスタンチノープルに幾分不安の念を惹起しつゝあり、右は土耳其青年黨の煽動に依るものと信ぜらる

又同日の電報に曰く、

△近東形勢不穏　土耳其政府はマセドニアに於ける軍隊の不滿に鑑み小亞細亞に於ける豫備兵二十八個大隊に動員を命じ同時に列國に通牒を發し、アゼンス、ベルグレード及びソフイアの各政府に強硬なる陳情を爲し、武裝的匪徒の土耳其侵入を防止せしめんことを要求せり

事態は甚だ重大なるが如し、土耳其政府の態度や察するに除あり、然り、叛逆的運動は漸く蔓延して停止する所を知らず、即ち十八日の電報に曰く、

△歐洲土耳其騷擾　ネヴロコツプ來報に據ればアルバニア人はリンマ、フエリゾヴイツチ各地に於て土耳其官憲を放逐しプリシユチナに於ても同樣の暴動を爲せり

趁て十四日の伯林通信に曰く、

△土耳其暴動の激烈　青年土耳格人の運動は益々猛烈となり、モナスチルにては千八百七十六年の憲法公然實施せらるゝに至れり、又土耳古の[illegible]となりたり

●土耳古[illegible]首相は讓歩をなさんとするの[illegible]あり、[illegible]態度を以て國民の要求問題に着手しつゝありし[illegible]は此の[illegible]軍隊をなさゞるべし

青年黨、革命黨の努力が然かく猛烈なるを見て、土耳古政府と國王とは遂に讓歩せざるべからざる運命に陷りて、已むなく[illegible]するに至れり、即ち去月廿五日の[illegible]イムス通信に曰く、

△[illegible]土耳其國王の憲政實施に[illegible]に[illegible]る君斯丹丁の[illegible]して曰く今回地方官は皆任内[illegible]下[illegible]新聞紙及公開言論の自由、[illegible]官、小學義務教育等の規定を有する一千八百七十六年の勅令に基き代議士の選舉を行ふ可きを命ぜられたりと

然れども、單に此の如き憲政の實施のみを以て其革命が果して鎮靜に歸すべきや否や未だ知るべからず、同日の別報に曰く、

△又[illegible]殺せられたるに先だち、叛徒はエニスストリンを占領しオスマンフエザを捕へて山間に逃りたり、軍隊は叛徒と協和し、各方面に於て新に暴動起り、基督教徒も青年土耳其黨を信じ之に援助を與へつゝあり

憲政の實施によりて或は一時革命の氣勢を挫くことを得べし、然れども二十世紀の大勢は世界の人類を驅つて共產主義に赴かしめつゝあり、唯彼等が果して共產主義的革命に直ちに突進すべきや否やに至りては、吾等に豫言の能力無し、吾等は唯だ其ドコまでも共產的革命を目標せんことを彼等に向て希望し得るのみに候。

●佛領安南騷擾　去月十五日の電報に曰く安南民族蜂起、バツト氏はバン・[illegible]に於て匪賊との戰に戰死し、安南人の教授一名通譯一名は反亂と歐洲人暗殺を教唆したる廉にてヒブトバゴダにて捕縛せられたり、巴里發電に據れば佛國陸軍備兵の通常交替兵は取消を行はるべしと、更に別報に曰く、佛國政府は同政支那に向け兵卒二千五百士官百十名を派遣せり、近に五千名を增派すべし云々と、波斯の擾亂あり、土耳古の騷動あり、東洋の風雲未だ止まなしと言ふべし。

●米國大統領選擧競爭　は今や最も激烈に行はれつゝあり、米國人民は[illegible]無く之に熱中し居るもの、如し、其候補者は民主黨よりウイリアム、ジエー、ブライアン出で、共和黨よりタフト氏陣頭に立たれ候、而して前者は勞働者を以て其後援となし、後者は資本家に據りて中原の鹿を爭はんとするもの、由、而して社會黨は前年と同じくデブス氏を候補者として傳道的競爭に熱心し居る由に候。

●瑞典船工騷擾　去月十五日の報道に曰く瑞典の造船所職工の同盟罷業長引きたる代ふるに英國職工を入るゝに至りたるに、早くもゴーテンベルグに暴動を惹起し、英國人の宿所として使用せられたるマルモリー船舶は、爆彈を以て爆裂せられ、一名死し七名負傷せり。

●露帝暗殺陰謀　去月十七日の外電に曰くソスノウイスに於て露國皇帝暗殺の陰謀發見せられたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○教育？（上）（女教師論）

小野吉勝

一

我れに「權威」を與へよ、さらば我れ鬼神となりて世界を征服せむ。我れに「不平」を與へよ、さらば我れ魔王となつて乾坤を破壞し盡して快哉を叫ばむ。

さはれ悲しい哉吾人の「權威」や「不平」は小なるかな微なるかな。

吾が力！政治上に於ける我が力！政治上に於ける吾が力は永遠絶體に進暢發達せぬ虚無なり。非情の砂礫すら成長し增大すといふにあらずや。而かも我が力は絶無なり、豈鬼神となり魔王となり得んや否、余は絶對に之を欲せず。

二

我れに「愛」を與へよ、「信」を與へよ、さらば我れ「眞信」の巖に倚りつゝ、一視同仁「愛」の双手を併べて衆生濟度の聖業に從はむ。

さはれ悲しい哉凡夫の我れ、山を樂むの仁者にあらず、水を喜ぶの智者にもあらず未だ其身の安立をすら建つるに足らず。その有すと自認せる「芥材の如き信仰」すら時として且消滅し盡して昏沌の闇に泣くこと幾そたび！。

既に消極的なる「信」すらなし、況んや積極的なる「愛」の活動に於てをや。

あゝ己みなむ乎。

三

さなり吾人未だ基督の大愛、佛陀の大慈を解せず、ポーロの力なく、日蓮の信なしさらば單に己みなむか。あゝ我が心痿えぬ我が眼くらみぬ。さはれ感謝すべきかな、未だ我が心全く滅せず、我が眼全く盲せざるを。

我れは仄かなる喜悦のこゝろに搏たれぬそは微かなりと雖希望の光を認めたれば也

我れは何となう暖さを覺えぬ、やがて我れは熱しぬ、我が心遂に躍りぬ。

鎭靜の後我れ、我が心を捻せしに、宜なる哉わが獻身や、そは「教育」てふ形を裝ひて我がこゝろの樹の蔭に宿れるあるを見出したれば也。

多謝す、我れは教育家たらむ、我れ斷じて教育家たらむ。さはれ吾人省みて教育家たるの資格ありやと。憮然又慄然。

天理教―社會主義―婦人

奥谷文智

▲僕は常に「世界婦人」を愛讀して居る一人である、其主張の斬新にして大膽なことは、恐らく日本第一であらう。殊に旭山兄出獄以來の誌上には生氣が大いに活躍しだしたように思はれる。

▲僕は、本誌が社會主義的立場から婦人の地位を高めようと努力するのは、確かに本誌經營者の卓見であると思ふ、●蓋し婦人が●●財産の一部であつたり、男子の私有物であつたりする間は、決して眞の人格的地位や自由や權利を得らるゝものでない。

▲ソコで僕は天理教と社會主義と婦人とに就いて思ひついた一二の感想を述べて見よふ

▲社會主義では、總ての生産物は總て社會の共同力で出來たのだからこれを獨占して私有財産とすることは甚だ不合理だと稱へて居る、天理教でもこれと同じように、一切のものは神樣のものだ。それを己の物とするのはホコリ（基督教に所謂罪の事だ）であると云ふて居る。

▲今でも一寸々々はあらうが、殆んど十五六年以前に於る天理教では頻りに「●ホ●コ●リ拂ひ」と云ふ事を實行した、所謂「ホコリ拂ひ」と云ふのは、元來總てのものは神秘のものである、然るに自巳の我慾の上に集積した財産だから、そんなホコリを拂はないと、神樣の御叱りを蒙つて、今に一家離散するか、身に破滅が起るに相違ないと云ふ立場から家財産は勿論のこと、田地田畑抔では一身迄も神に献納さしたものだ、こんな事は所在至る所で行はれたので、一時は實に盛んなものであつた、これは一寸狂的に見えるが、僕は如何にも根本的な壯快事であると思ふ、又これを理論的に攻究して考へて見ても甚だ最もなことではないか、然るに今の人間が財産に關する考へと云ふものは、全然利他と云ふことを無視して、利巳主義我利主義の上に集積したものである、こんなものは確にホコリであるに相違ない、彼等が『ホコリ拂ひ』をしたのも大いに理由のある事である。

▲僕は社會主義者諸君が財産の共有を主張しながら、人の財産を共有にした實例を聞いたことがない、然るに世人から愚人だ、迷信だと云はれて居る天理教徒の方が却つて無言の間に社會主義者以上の大事業を實行して居るとは實に驚くべき事實ではないか

▲社會主義が總ての私有を非認するのは、其出發點を物質的方面に有して居るのだが天理教で私有を非認するのは宗教である丈けに神靈的方面から出て居る、二者の差異は即ち茲にあるのである。

▲木下尚江氏は曾つて本誌紙上に於て、天理教教祖を批評して「中山みき子は、人生の深き奥義に接觸せり、彼女は我身其物は實は我物に非ずして、神のものなることを體得せり、「我物」と云ふ觀念其物が即ち實に人生罪惡の種子なることを了解せり」と云はれた通り、天地萬有の間に「我物」と稱すべきものは一つもないのだ、又前にも云ふた通り「財産」及び『私有』と云ふ觀念其者に大變革大刷新を來すにあらずんば、女子が財産の一部であつたり、男子の私有であつたりする桎梏から脱する譯には行くまい、

▲僕は天理教々祖中山みき子は實に崇敬すべき豪い人物であると思ふ、日本にもかゝる大革命家が婦人の中から出たと云ふことは、日本婦人の一大榮譽ではないか、

自から賤しむを止めよ

百世居士

世には、山間に隠くろゝ、所謂厭世家があるかと思へば、又いやに聖人振つて、超然的生活をなさる、所謂人格先生もある、余は此の中、何づれなし嫌いだ、而しまた嫌いな奴がある、之は所謂人格先生を倒罵し、好んで品性を下劣にするの先生である、世に何が醜くいといつた所で、此の先生の人格ほど、醜くいものは、又とあるまい、此の先生の所謂人格先生を、惡罵したる所に曰く、現社會の罪惡は、殆んど其の總てが、資本家制度の産物である、然るに彼の所謂人格先生なるものは、人の腐敗墮落を見て、一概に其の人の品性の如何にあるもののやうに誤解して、一種の教へてふをな呼んで、聖人の教へたるものに說く、其の愚や憫むべく、其の無智や笑ふに堪えたり」さ、

余も、現代の罪惡の大部分が、資本家制度の特産物なるとは、今更のやうにいはなくとも分つて居る、故に現社會の革命を、叫けぶその丶一人であるさりとて、殊更に人格先生を罵つてまで、自ら賤しむる必要もあるまいと思ふ、余は今の人格先生中に赤貧洗ふが如くにして、猶且つ高潔なる人を發見するに苦しむと共に、又不幸にして、所謂人格先生を罵るの先生にして、人格の高尚なる人があるとも思はれない、斯くいつたとて、誤解して貰つては困る余は人に向つて一汝須らく人格を高尚にせよと強ゆるものではない、然し人には、眞善美を渇望する性質がある、於此乎眞善美ならざる、現代の缺點を摘して少なくとも理想に近き社會を、現出せしめんと努力して革命は起る、若し然らずとせば、革命とは理想を前提としての、進化なりてふ金言は、一文の價が無くなるのではあるまい歟。

既に革命が、眞善美を理想として、起るものとせば、革命家なるものも亦、其の品性を眞善美にしても、よささうなものだ、成程人は未だ野蠻の時代を去つて、余り久しい間でも無いのだから、時に醜惱を演じ、罪惡を仕出かすこともある而し同じ人間であるから、修養して高尚な品性を有つとも、強ちに困難事でもあるまい、幾ら修養したとて、出來ないこともあるから、そこは人事を盡して、天命を待つの外は無い――孔子は陳蔡の野に饑えた、而し彼れが聖人として、今日尚ほ賛美され、敬慕さるゝ所以のものは、彼れに唯だ一つの人格のあつた爲めである、顔回は糟糠だも、尚ほ飽かずして斃死した、而し彼れの彼れたる所以のものは、彼れの品性の高潔なりしが爲めである、若し彼等にして、人格の修養てふとの無かりせば、聖人でも、君子でも何んでも無い、之れと同樣に、革命家も滿更人格が不必要でもあるまい、殊に先輩諸兄は、大いに此の必要を感ずるだらうと思ふ、先輩諸兄にして、之れ無かりせば、所作同志を去つて不平の徒とならしむるの、恐れがある、是れ實に注意すべき處だらう、人格先生を罵倒するもよし、然し人格先生を罵る所以のものは、自己の人格の下劣なるを採み消さんが爲めの奸策たることを知らば、好んで自らを賤しめ、下劣な心を以て、同志諸君の感情を、害しないやうに願みたい自己の人格の下劣野郎などを棚にあげて、行進同志諸君の人格の下劣なるを、罵らないやうに心得て居つて貰いたい一方に所謂人格先生を罵倒するかと思へば、他方にあつては後者の人格云々をカスが如き無屑背理のドグマは止して貰いたい、出來得べくんば、老年の革命家は、後進者に對して冬の日光の暖味を持つて居つて、追從の諂手を揮はないように頼む。

余とても貧困の苦痛は知る、而し鈍する必要もあるまい、希くは武士は喰はねど高楊子の心を以てむさしていたい、人の人格、殊に後進者の人格を罵倒した餘沫で以て、自分の人格まで、吹き飛ばさないやうに、してもよささうなものだ、されど内省す、余は自らを顧みずして、他人に向つて汝須らく人格を高尚にせよと強ゆる程に下劣でも無い、然し出來得る限りこれが修養をなさんとするものである。それには恐らく異論はなからうと思ふ、敢て勧む婦人で自ら賤しむを止めよ、

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

人間錄

白衣人

○蚊は血を吸はんが爲めに生くるか、生きんが爲めに血を吸ふか、明白なるが如くにして、而かも甚だ明白ならず。彼は血を吸はんが爲めに務めて、穿の脈する所となり或は燭火の焔に燒かる。生きんが爲めの努力は却つて死を招く。之れ生物界の奇なる現象ならずや。

○豈只に蚊とのみ謂はんや。總ての生物、凡そ然り。人に於て最も然り。生きんが爲めに死を得とは、噫之れ何を意味する乎。

○生故の努力とは運命の前の賭博也。丁と出するの時「生」ならば、半と現はるゝの時は正しく『死』也。

○「生」「死」は時の差異のみ。更に位置の差違のみ。

○『生』とは宇宙の普遍的エナヂーが、暫し個體化せる時の符號也。此力、個體を離れて宇宙の本體に返る時、人は呼んで「死」なりと云ふ。是も符號也。

○努力に價値ありとは、人を欺くの言也。人の子を謎はしむるの虚言也。而かも價値なしと云はゞ、是も僞り也。

○努力は價値の問題に非ずして、實に趣味の問題也。趣味を觀照し得るものにして始めて努力を論ず可し。

○生死と努力に何等の交渉なし。而かも生死の趣味と交渉すること、人間事中其第一位に居る。

○努むる者果して生を得可き乎、努めざる者果して生を得べからざる乎、觀よ、生死と努力とに何等の交渉あるてと無きを。

○宗教は信仰のものに非ず。實は趣味のもの也。而して其卑俗なるものゝ一也。

○宗教は一の道樂也。彼の神佛に跪きて縋る者に看よ、其如何に餓れるかを、言葉の上にも、変態の上にも、之れ、是を一の道樂と謂はずして果して何ぞや。

○道樂は餘裕ある人間の上に顯はる。日夜生死の間に奔走して寸暇なき者、遂に宗教を言ふてと無し。

○教育は人間の苦痛を增すものなるも、一も幸福を齎すてとなし。

○故を以て、教育は直ちに投棄す可しと言ふ者あらば、之れ天下の至愚也。

○教育は人に趣味を與ふ。樂むの趣味に非ざるも、思ふの趣味也。悶ふるの趣味也。泣くの趣味也。更に身を削るの趣味也。遂に死に急ぐの趣味也。

○藝術は趣味の極致也。藝術中最も高級なるものを詩となす。故に詩は趣味の結晶也。

○詩の色は先づ紅きもの也。血の色なり。其色淡きときは、之れを悲哀の詩と謂ふ。終り也。其色白きは狂の旺なるの印、無色透明なるに至つて、窮極と云ひ得可き乎。

●放吟

孤舟桿耶

（旭山兄が出獄土産を讀みて○○に寄す）

天地晦暝梅雨の空
遙かに閃めく西歐の一角
燦たる珠玉萬波に搖らぐ
餘沫打寄す日本島

嗚呼や
猶頑大の蠹蜘談
獄裡は頭腦の培養所
嘲まるなよ
奴輩飼ふ犬にその脛を

噫死せよ悶死せよ
死は復活の曙光也
見よ西歐の一角を
開け汝が脚下より

隨感隨筆

石川旭山

（此一篇は石川兄が故郷埼玉縣本庄町より寄せられたる書翰中の一部なり、空しく屑籠中に葬るに忍びず茲に掲載することとなしぬ（ひでこ））

▲大そう御暑くなりました、此程中はいつもの御病氣で御苦しみなされし由、氣候不順の折柄なれば何卒御攝養專一に願上ます。僕の方でも、母が腸かたるで激しくやられる。續いて僕が少しやられる、少々閉口しました、滿腔大醉です。

▲久ぶりの歸省、殊に出獄後の歸省の事なれば少しく歡迎されて居ます、ムサ苦しい、貧乏な家でも、親や兄弟と一所に居るのは樂しいものです、社會全體の人が親兄弟の樣な間柄になるのは何時の事でしやう。

▲今ま一所に居る僕の親、兄弟は昔僕と主義を異にし、趣味を異にし、智識を異にし事業を異にして居ます、ケレど僕は十四五年來付て彼等に對して厭な感情を持つたとがありません、彼等も亦僕に對して傲岸で惡い顏をしたとか無いのです、ソレは時々口論もすれば、小言も言ふ、ケレど其れは何時も互の身を思ふての事で、互に愛し同情なるを疑すといふとがありません、親兄弟であらうが他人であらうが、疑はりの無い筈なのに、世間に深い隔い溝や、高い垣を造つて、隔て合ふのは實に不便な事です。

▲今僕の居る家（種物）は僕には多くの紀念を與へて居りません、六七年前兒が初めて此處に逃走店を開たのです、僕の生家は此處より二十丁許なる利根河畔にあると、貴姉の詳知せらるゝ處です、此に比すれば、今の御住宅は僕に取ても隨分紀念多き處です、僕には實に第二の故郷です。

▲回顧すれば、姉の一家がソコへ移轉したのは丁度十年前の事でした、僕はアノ時は既に姉の下に食客たるの身分で無かつたが、併し一ケ月中の二十日以上は其家庭の一人となつて居ました、アノ時は姉御夫婦に於ては久しき風霜氷雪の後、花の蕾に風春に綻び初めたる如き嬉しき中に暮し給ふたとでしやう、何となれば、アノ時までの姉御夫婦が貧困と侮辱と病家庭と戰はれた苦心は到底人の察するとの出來ない程であつたのが、アノ時に至て初めて少しの自由と希望とを得られたからです。

▲世の變遷は實に早いもの、姉の一家が初めて此地に移轉せられた時、貴家の前も後も一面に野原であつて、今時分には蕎麥なぞが地面を蔽ふて居たのですが、今はドウです、前も後も家を衝くばかりに家が立ち塞がりました、そして面も裏も坐ながら廣い野や茂つた森なぞを愉快に眺められた貴家の如きも、何時の間にか其庭に竹垣を結ひ廻はされて狹くるしい家になりました、自然はアレ程に人を解放し自由にするのを、何時の間にか人自ら束縛し、人自ら壓制する樣になるのです。

▲人の居らぬ時に門戸を開放したものが、人が多く集つて來たからとて急に其門を閉ぢると言ふのは不思議な譯です、古は人が自由を得ん爲に社會を造つたといふに、今は人が社會を作らん爲に却て自由を束縛して居るのです。

▲古は、自然は崇拜の對象であつたのが、今は、自然は我慾の對象となつたのです、アノ廣い野原に作物が一面に實つたのや、高く生い茂つた森などを見た時は、自然に其壯濶と莊嚴とを感じますが、前も後も夫婦喧嘩の聲や、借金取の聲などばかり聞ゆる時は、餘り美しい感情は起りません。

▲今僕の居る處は、此自然が偉大な姿をして僕を歡迎して與れる、そして親や兄弟は「自然の人」の本情を以て亦僕を愛して與れる、僕は實に勿體無く感じて居ます。

▲とは言ふものゝ、今日の我身の上を顧みれば隨分の苦境といふものでしやう、久しき獄中生活を終て出獄して見れば、居るに家無く、喰ふに食無く、被るに衣無く、而して力と頼む僚友は皆離散すると云ふ有樣ではありませんか、僕は寧ろ山口君の如く再び獄に行くの却て氣樂なるを思います。

▲併し是は僕の懶惰です、僕は今疲勞の壓迫を感ずると甚だしいのですが、自ら元氣を鼓吹して「西洋社會主義史」の原稿を整理して居ます、之を思へば、病軀を抱いて再び獄に投せられた山口君の不幸に同情せざるを得ません。

▲姉の身の上も仲々に困苦多きとですね、イヤ〳〵僕どころの事ではありません、老母を脊負ひ、小兒等を抱いて此セチ辛き人生の行路を歩むのですもの、其上收支償はぬ「世界婦人」といふ兒供まであるのですもの、如何に男の樣な姉でも堪らないです。

▲僕が親しく姉に付ふ時は、何時も意地惡いとを言ふては困らせますが、併し心の底では姉が不幸なる身の上、苦痛多き境遇を思ふては涙無きを得ないのです、互に姉たらん弟たらんと相誓ひてより茲に十六年、爾來、或は家庭の破亂に苦められ、貧困の鬼に噴まれ、惡戰苦闘是れ日も足らずして今日に至つた、あゝ思ひ回せば、長い〳〵戰ひではありませんか、併し人生の妙味は實に此苦戰中にあるのです。

▲先日、高崎に行き、東北評論社にて同志高畠、神田の諸氏に會いました、それから前橋に參り、十五年ぶりで某女史に會い、出獄以來始めて樂しき無邪氣なる一日を暮らしました、此女史は僕が小學先生たりし時の生徒で、其後神戸女學院、津田英學塾、女子大學校を經て今では立派な見識ある先生になつて居るのです、併し其人が今でも僕の事を「先生……」と申すので、僕多少面恥かしからさるを得なかつた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社會民主々義の大成者
カル、・マルクス(二)

石川旭山

▲倫敦生活

此時マルクスは倫敦に趣けり。彼は革命的精神の復活せざるを看取し、又、未だ道義的經濟的生命を失はざる當時の社會が其政治的騷亂を修復する能力の意外に大なるを發見し、爾來十二年間、彼は全然積極的革命運動を拋棄するに至れり。彼の『共産主義同盟』は革命に際して紛亂し一八五〇年には二派に分裂し、一八五二年には遂にマルクスの同意を得て解散するに至りたり

之より十年間、マルクスは倫敦に於て平靜なる生涯を送り、或は『ニューヨーク、トリビューン』其他の新聞に寄稿を爲し、或は近世産業の研究に心を潜めたり。彼は英國博物館圖書室に於て多數の書を讀めり、而して多くの英國經濟學者の文書に通曉したり。彼が有名なる「剩餘價格」に究達せしは蓋し此時に在り。抑も『剩餘價格論』は英國の社會主義者が殆んど一時代以前に於て既に唱導せし所にして、William Thompson が一八二四年に著せし『分配の原理に關する質議』Inquiry into the Pinciples of the Distribution)は蓋し能く之を說けるもの、ロバート、オーエン及び其同志の如き、又、彼のチャーチスト一派の如き、皆熱心に之を唱導したるものなりき。然れども、之を組織的に說明して一主義を建設し以て世界的社會主義運動に之を紹介せるの勳績は、即ちマルクスに在り。彼が此時代の生活は、讀みては考え、考えては讀むにありき。而も又、數種の小冊子を著けり。一はルイ・ナポレオンに對するもの、一はパルマーストン公に對するもの、次は彼の同黨社會主義者たる Karl Vogt に對する嚴酷なる個人的攻擊なりき。更に一八五九年に發行せる『經濟學評論』(Kritik der Politischen Oekonomie) は彼が新なる經濟學研究の結成物として重要なるものに屬す。然れども革命家は永久に革命運動を拋棄すること能はず、久しく抑制し來りし憤激は茲に再び頭を擧げぬ。一八六四年、有名なる萬國勞働協會は倫敦に於て設立せられ、マルクスは再び世界的運動の指導者となりぬ。

▲萬國勞働協會

萬國勞働協會は曩きに廢滅せる『共産主義同盟』の復活せるものと言ふを得べし。其主義は同一なりき、其組織は同一なりき、而して其創立大會(一八六四)に於けるマルクスが演說の冒頭は、實に共産黨宣言(一八四七)の結尾たりし『萬國勞働者團結せよ!』てふ一語なりき。然れども、最初會員等の多くは皆平穩なる理想を有し、其計劃は諸國勞働者の智識の交換を爲し、相互の境遇を討査し、以て社會經濟の秘密を詮鑿し、以て勞働者の境遇を改善するに資せんとするに在りき。然るにマルクスは此團體に對して革命的社會主義を主張せり。彼は此團體に於て決して重要なる地位を有せしに非ず。彼は唯だ協會の獨逸交通を司る一幹事に過ぎざりき。然れどもマルクスは、最も親密なる獨逸の同志と共に始めより終に至るまで實際的に有力なる活動を示せりき。

萬國勞働協會は其組織に於て强固なる一致を有せざりしと雖も、普佛戰爭及び之に次げる巴里コムミユンの叛逆までは尙ほ其團體を繼續したり。彼等は一般の戰爭に對する如く、激烈に普佛戰爭にも反對し、總ての革命に對する如く、熱心に巴里自治民の叛逆に贊同したり。協會が果して巴里コムミユンと共謀者なりしや否やは精確に決すると能はざるも之が爲に勞働協會の名が重大視せらるゝに至りしは事實なり。元より勞働協會全體が深く巴里一揆に贊同せりと言ふに非ず、唯だ少くとも勞働協會の首領連が巴里コムミユンに熱心せしとは疑ふべくもあらず。而して萬國勞働協會が巴里コムミユンの蜂起に有力なる原因たりとの事は信ずる能はざるも、巴里コムミユンの死滅に歸せしは事實なり。即ち巴里コムミユンの後、英國の會員は全然脫會して又歸らず、一八七二年ヘーグ大會に於てマルクス派の集産的社會主義者とバクーニン派の無政府的社會主義者との分裂あり、遂に其萬國運動は全然消滅に歸せり。

勞働協會瓦解の後、マルクスは又公共の運動に携はらず、專ら其生涯の大著作たる『資本論』(Das Capital)に心を注ぎ、其第一卷は一八六七年に始めて之を發行したり。然れども爾來彼は常に健康勝れずして、其作業も從て中絕すると多く、一八八三年の春、其當に完成に至らんとするに際して彼は溘焉として逝けり。

▲彼の宗敎觀

マルクス等が基督敎會を攻擊せしは事實なり。然れども彼は決して無神論者に非ざりき。米國に於て社會主義の學者たり有力者たる John Spargo 氏は、本年三月の『米國社會主義評論』誌に論じて曰く「急進的哲學者たるマルクスがサン・シモンの『新基督教』を透して社會主義者となりしは著しき事實なり。サン・シモンの宗教的神秘主義とマルクスの物質主義との間に大なる溝渠の存する如く見ゆるは多くの人をして困惑せしめし所なり。彼が物質主義の裏面には偉大なる道德的精神的主張の伏在せしに非ざるか、否其伏在せしと明確に非ざるか。莊嚴なる理想主義の典型たる生涯を送りし、又、ダンテの神曲を始より端に幾度も復讀せし程の熱誠を有せし此人が、熱切なる精神的性質の人たりしは確實なり。

『マルクスが酷薄なる多くの攻擊を宗敎の上に加へしとは人の能く知る所なり。而して之れ社會主義反對者の決して忘却せざる所なり。然れども中年のマルクス、萬國協會時代のマルクスは、最も穩和なる宗敎批評家の一人となり、總ての宗敎の根本的道德原理に全然同意したり。但し彼が神學上の意見は不可知說なりき。「汝が信ずるの理由如何?」とは、彼が問ふ所なりき。而して其他人に傾聽するに忍耐と寬大と溫厚を以てするは何人も及ばざる所なりき。而して彼自身の語を聞けば常に正直溫厚に『予は知らず、予は之を解する能はず』と言ふなりき。代々ラビたりし家の後裔、卓越せる兩親の子たるマルクスが自然に精神家的性質を存するに至りしは怪むに足らず。ヴォルテイルの門弟たりし彼の父は素より神を信じて之を其兒に談れり、彼の母は亦神を信じ、人、彼女の信仰を嘲弄すれば、彼女は之に答へて「神の爲に非ず、己れ自身の爲に」神を信ずと言ふを常とせり』。

『予は溫厚なる不可知說なるマルクスを好む、信仰の理由に就て其友の談るに對する、深き心切なる精神を以て寬大に且熱心に之に傾聽し、而して彼自身に就ては單に「予は知らず」と言明するマルクスを好む』。

更にジョン・スパルゴーは四月十一日の『ニューヨルク、ソーシアリスト』紙上に言明して曰く『カル、・マルクスは公然無神論者と稱する者に對して深き輕蔑を禁ずる能はざりき。而して常に、彼の、社會主義運動を獨斷的無神論に歸依せしめんと欲する者に最も激烈に反對したり。彼は全世界の社會黨員と同じく「宗敎は個人自覺の問題なり」てふ態度を取りたるもの也』。

予は未だマルクス自身の筆になれる宗敎論を讀みたると無く、從て彼の所說を詳かに評論すると能はず、唯だスパルゴー氏の語を抄譯して以て讀者の參考に供するのみ。

○　○　○　○　○

○『資本論』梗概

▲序

マルクスの『資本論』は三卷より成る、第一卷、資本家生產の順序、第二卷、資本流通及び發達論、第三卷、學說史是なり。第二卷以下は、彼の死後、其友エングルス等の校訂を經て世に公にせられたり。然れどもマルクスが意見の神髓は第一卷に於て既に盡されたるものと見るも不可なかるべく、而も其第一卷のみにて實に八百頁の大冊を成し、左に記する所はジョン・レー氏の『Contemporary Socialism』中より摘譯せしものにして僅かに其第一卷の大要に過ぎず、讀者願はくは其心して。

▲總論

マルクスの『資本論』は現代社會主義の經典とまで稱せらる、其文章の甚だ結屈なる爲め、普通一般の同志に對しては恰も封ぜられし物品の如き觀ありと雖も、社會主義宣傳者が之に依て激勵と論據とを得ると決して尠少ならず、假に此書を社會主義の代表的作物たるの地位より離すも、其有力重大なる大作なるとは何人も之を非認すると能はざるべし。其根氣強き詮鑿、其材料の精密なる討査、其論理的分解の深刻なる、其說明の精細なる、蓋し多く見ざるの書と謂ふべき也。唯だ著者が餘りに論理的分解に拘泥せるの結果、其解說を明晰ならしめずして却て遊晦ならしむるに至れり。彼が如き分解を用ゐざるも、充分に明瞭に解說し得べき枝葉なる點に迄で、其力を用ゐ過ぎたるの觀ありて、而も其主張の本據たるべき首要點に於て却て分解的說明を怠りたり、彼が態度と方法とは、吾人をして坐ろ古の宗門學者の風を想起せしむ、彼が社會主義的形式に餘りに執着するは、實に近世的に非ざりき。

(立論の形式)マルクスが立論の形式は資本の起源及び其社會的効果を詳察するに在り、而して其資本てふ名稱は彼自身獨特の觀念を表示するものなりき。普通經濟學の說く處に依れば、『資本』とは生產の用に供せんが爲直接消費以外に保管せらるゝ部分の富を意味す、而して其富が之を用ふる所の勞働者に保管せらるゝも、賃金を取て勞働者に貸す所の人が之を保有するも、

(以下七面へ續く)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

或は一定の賃銀を以て雇入れたる勞働者をして其富の上に勞作せしむる人が之を保有するも、其富が資本たるの意義に於て毫も異なる所無し、漁夫の小舟は漁船會社の汽船と同じく資本なり、其小舟が之を實際に遣ぐ者に屬するも、又、其漁船が之を一度も見ざる人に屬するとも、其小舟と漁船とが共に資本たるに於て差異あらず、漁夫は勞働者にして同時に資本家なり、然れども漁船の場合に於ては資本は、一の團體の保有する所、而して勞働は他の人の担任する所なり、マルクスは唯だ此作用の區別を說明したる後、資本に就て說て曰く、是れ唯だ歷史的分類にして論理的分類に非ず、昔時は人皆自己の要求を充さんが爲に勞働したり彼等が取得したる稀き幹とは彼等自ら之を貯蓄し、所有したり、資本は勞働者手中の器具に過ぎざりき、然るに近世に至り、殊に十六世紀に於て外國貿易の勃興して以來此位地は漸く轉倒し來れり、今や生產は投機家の支持する所となりぬ、彼等は資本を提供し、勞働者の賃銀を支拂ひ、以て投資額に過超せる生產財產を取得したり、而して勞働は單に資本の手中に存する器具となれり、資本家とは、己れ自身は生產者に非ずして、唯だ生產者の爲に林料と器具とを備へんが爲に金錢を提供し、其返報として更に多大なる金錢を取得せんとする者を言ふ。此の如く資本を金錢として說明するは之を普通談話として見れば何等誤謬ありと言ふべからず、然れどもマルクスは之より直ちに普通の迷路に走り、金錢を以て全然資本と同一なりとし、此兩者は異りたる順序に流轉する同一物件なりと稱するに至れり、彼曰く、貨幣としての貨幣、即ち交換の媒介としての貨幣は交換せらるべき二箇の物品間の中介符徵なり、其流轉の順序は即ちC（商品）…M（金錢）…C（商品）なり即ち物品は貨幣に替り、貨幣は更に物品に再轉す、之に反して、資本としての貨幣は兩極端に存立し、物品が其中介條件となる也一定額の貨幣に代るに更に多量の貨幣を以てするの媒介となる也。而して其流轉の順序はM（金錢）…C（商品）…M（金錢）となるべしと素より資本も他の富と同じく貨幣の符徵を以て表示することを得べし、然れども之に依て資本と貨幣とを同一視するは唯だ混雜を惹起するに過ぎざるのみ、且つ其數理的に如何にも精確なる如く見ゆるが故に、却て多くの混雜を生ずる也。

（價格と勞働）　マルクスか解する如く、資本は資本其の物を增加する爲に用ゐらるゝ、獨立の富なりと稱するを得べし、「資本家組織の產業が行はるゝ社會」に於ては、總ての富は明かに此性質を帶ぶ、昔時に於ては、富は生產者が未來の需要に供へんが爲に生產し保有せる生計手段の貯蔵なりき。然るに今日に於ては、富とは他人の需要に應ぜんが爲に、市場に賣らんが爲に、資本を增加せんが爲に作られたる莫大なる貨物の集積を言ふなり、マルクスが發見せんと欲する所は、如何にして此の如き獨立の富が之を生產せざる者の手中に集積せらるゝに致りしやに在りき。殊に其富の使用により更に富の增加を期待するに至りしは何時頃なりしかに在りき。蓋し其增加ありて始めて、富の蓄積を爲し得べければ也。マルクスが解說に努めし所は、即ち、價格の增加が唯だ生產の階段に於て生ずるのみなるを、其階段を上進する者は死しる林料其物に非ず、唯だ其林料の上に働く所の生命ある創造力ある勞力其ものに依るものなると、而して其死せる林料の所有者が經濟上に最高權力を有して、之を製作せし勞働者より之を盜奪せしと等を明にするに在り。

（價格と交換）　マルクス思へらく、價格は交換の經路に於て生ずる者に非ず、蓋し交換は同等價格の物件を移轉するに過ぎざれば也。或る意味に於て其交換の兩當事者は所得者なり、蓋し各自が自己の要せざる物件を以て自己に必要なる物件を取得したれば也。而して兩者の物件の效用は此交換に於て增加したりと雖も、未だ其價格を生じたりと言ふべからず。交換とは、其各當事者が等しき價格に對して等しき價格を與ふるとを意味するのみ、決して價格の增加を來すと言ふべからず。

かくて彼は、唯だ交換の一階程に過ぎざる商業が、決して價格又は剩餘價格を生ずる能はざるとを定め、而して曰く、是れ實に剩餘價格起原の問題をして一層謎的ならしむるもの也、蓋し吾人は玆に明かに極端なる撞着を發見すれば也。即ち、剩餘價格は、單に同等價格の交換に外ならざる物品の流轉に依て發生し得べきものに非ず、而も剩餘價格は流轉の過程以外に於て生じ得べきものにも非ず、蓋し貨物を與ふる者も、交換に依て生活する者も、共に生產する者に非ざれば也と。此の如く玆に一の謎を存す、而してマルクスは自ら之を解かざるべからず、彼は曰く、眞の價格は市場に於て生ぜしめらるゝものに非ず、然れども貨物は市場に於て購求せらるゝものにして、市場には價格を生ずる所の不可思議なる貨物を存す、其貨物とは即ち人の勞働力是なり此力の使用、此力の消費、此力の費用は、即ち價格を生ずる也。然れども其不思議なるは、其所有者（勞働力の所有者即ち勞働者）が一其所有物（即勞働）を賣らざるを得ざると是なり、蓋し彼等は其製產物を提供する間にも自ら生活するを要し、而して一日生活せんが爲には其財貨（勞働力）一日の使用を賣らざる可らざれば也。然るに彼等は其代價として受くる所の賃銀よりも多くを製作す。此過超部分は即ち剩餘價格にして、且つ有ゆる資本集積の秘密、本源なり。一日に六十錢の價額を造出する能力は、之を三十錢にて手に入れらるべし。蓋し其三十錢は之れ彼等の必要生活費に充てらる可ければ也。故に剩餘價格とは即ち勞働者の必要的生活費額と勞働者の生產額との差額なり。而して現存組織の下に於ては、此剩餘價格を橫領する者は即ち勞働者に賃銀を供する所の事業家と稱する者なり。

マルクスは其主張の基礎を通常經濟學者の用ふる二原則に置いて、然も一般學者の遵守せる制限に從はずして自己獨特の意義を之に附加したり。其原則の一は即ち價格は勞働より生ずてふと、及び貨物の自然的價格は其生產の費用に依て定まるてふと是なり。其二は、前者の特殊なる應用に過ぎず、即ち、勞働の自然的賃銀は其生產の費用に依て定まるてふと、及び其生產の費用は勞働者生存の費用なりてふと是なり。マルクス乃ち此原則よりして現代社會組織の缺點を發見して曰く、總ての價格を生ずる勞働に對しては、其如何に多くの價格を生ずるに係らず、僅かに限定せる生活費を拂はるゝのみと、而して彼は更に推究して、此組織の繼續する限りは、勞働者生產の價格は益々多く押領せられ、勞働の時間は益々長く、勞働の反復は益々迅速となり、而して勞働者は之が爲に特別に與へらるゝと一も無きとに及びたり。

吾人今まマルクスの主張を公平に解釋せんが爲に次の如き題目に從て簡單に之を記述すべし。第一價格論、第二賃銀論、第三正規の勞働時間、第四機械論、第五請負仕事、第六相對的人口過多是なり。

○銷夏雜感

可笑生

夏……暑い苦しい夏、人は何うしてこの暑さを凌いで居るだらう、我々農家は何等の銷夏法もない、朝起きて閑な人が散步をする代りに草刈に行く、田を見廻りに行く喫飯して山へ行く者、畑へ行く者、中にも烈しいのは除草だ一蓋の破笠に頭の割れそうな日光を浴びつゝ、勞働するのである、モーッとする草いきれに目も眩んで倒れそう併し、この炎熱が收穫に大關係があるのであるから皆暑い上にも暑い様にと祈て居る

紳士とか云ふ人々は避暑と名け、納涼と云ては色々の遊戯をやつたり、方々へ遊びに出掛る。炎天に田の中を這て居る者と山水明媚な所に悠々と遊て居る者との間隔は火と水程の差があるであらう。

炎天に吹いられて之に投げ付ける、塊の土だもない我々にはこの暑い／＼苦みも、何て生活の保證を與へて與れぬ。米を作り作ら米を買て喰はねばならぬ、米を作る人米を買ふ。この不可思議な現象は誰の胸に湧く疑問であらう。避暑者に暑さを忘れて居る人々は米の味は知てるであらうが我々の苦しみは知らぬであらう。米粒は人民の汗と云ふ諺が我々には切實に感ずる。

勞働は神聖と云ふ、神聖とは皆苦痛を忍はなければならない者かしら、色々の感情が衝突して我々が一番苦痛な時が或る一方の遊樂の好季節である。斯ふ考えた時何とは知らず妙に心細く、エー馬鹿々々しいと云ふ様な氣がする。

日が西の方へ沈でから歸り、入浴、喫飯、寐轉で居ると、月が山の端を放れて、そよ／＼と青田の上を吹て來る風に、漸う蘇生の思をするのである。田舍の夜景閑靜と云ふよりは寂寥の方である。詩人であつたなら嘸面白い興を催すとであらう。されど何の趣味なく、詩を作るよりは田を作れの我々は唯疲勞と數數の蒼蠅のを感ずるのみ。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

小説

放浪

（五）

ゴーリキイ著　旲打生譯

兩人は夜に紛れて、稅關番の所に來ると、其の傍に小舟が輪になつた鎖で埠頭の石垣に繫がれてあつた、空は曇り、風は吹き小舟は互に觸合つて、鎖は轆轤鳴つてゐた……私は難なく飛乘り、輪を解いて岸から引き離した。

吾等の所から五アルシン（露の尺度）も高い所を一人の稅關番が、口笛を吹きながら彼方此方を徘徊歩いてゐた、彼が佇立ると私は仕事を中止るのであつた、足の下に一人の男が首まで水に沈つてゐるのに氣が付かす、天候の危險を怖れて波濤の方にのみ注意してゐた、私が仕事を中止ても鎖は絕えずがら／＼鳴る、シャクローは舟底に橫はつて何か私語いたが、波の音に遮られて聽えなかつた、鎖を握つてゐると……波濤は小舟を呑んで、刹那に片から五ザーシエン遠くへ投げた、私は鎖を引きとめたが同時に傍へ倒れた、急ぐ起上がつて二枚の洲板を離し、櫂の代用りにして漕出した。

雲は空を罩め、海は浪立ち、シャクローは舵に抱き付て座つてゐたが、舵と一緒に波濤の谷に沈んで私の眼に見えなくなるかと思ふと、又高く私の頭の上に叫ぶのであつた、彼は私の注意に從つて足を小舟の腰懸に結付けて、番人に聲を聞かれるのを怖れてか、叫聲を歇め顏に白い斑點を現して舵を保つてゐた、舟は仲々進まない、段々後の方に流れるので兩人の心は穩やかでなかつた、如何するんだ、と問ふと彼は恰で航海者のやうに巧みに舟を馭した、櫂の代りに使用つてゐた私の板は少しも役に立す唯だ水泡を手で擦るのみであつた、風は脊後から舵側の方へ吹ので、心配は絕えない何處まで行くのか知れぬ、吾等は海峽を橫切らんと足掻つたが、遙か向方にケルチュの燈光が見えたので稍々方針が定まつた、巨濤は漻々鳴つて、憤るやうに、互に衝突しながら舷を越へて打込み、沖へ乘出すに從て益々激しくなり、手に取るやうに聞える泡の消る音は脳や精神を痲痺させた……

……小舟は走り始めた……速に、益々速に、方向を保たんと苦心した効果は直ぐ現はれた、絕えず谷に沈み、亦高き波濤の山を飛び、日暮れて雲は深く厚くなつて、燈光は舵の脊の暗に消え、波濤は怒つて威嚇すやうな水平線下に光を葬り、暗中に小舟を飛ばす波濤の外、全く何物も見えなかつた、忽然轟を發して手に持つてゐた洲板を奪ひ去つたので、舟底にあつた倘一ツを取擧げ、船端に當て兩手で堅く保つた、其時小舟が高く飛んだので、シャクローは野蠻な、大きい聲で怒鳴つた、私は暗の中に勢なく、小さく縮んで、狂暴な現象に圍まれ、彼の怒號に昏迷せられて、搔狂られた、冷たい胸迫を抱いて四方を覗いたが、世界は總て恐怖に充ち、唯だ鹽の露を撒き散らす波濤の白い峰と搔亂されたやうな雲の山のみであつた……、周圍に見える物一ツとして恐怖くないものはない、量り知るとの出來ない强い壓迫を悟つた時私の悲哀は非常な高度に達した、死は避け難きものである、此の冷淡な、水準りする理法は、如何しても……美……に依つ緩和げられねばならぬ、さも無いと餘りに苛酷、餘りに無作法である、若し死來つて、火に燒かれ、泥土の中に沈とすれば、私は心を惱すであらう、寸時も永く活んでとを希ふであらう……誰の心にも此の點は一致してゐる……

「帆を揚げ！」とシャクローが叫んだ。

「何處にあるんだ？」と私は問ふた。

「僕のチェツクメニィ（哥薩克の外套）……

……」

「それを此方に投げ！、舵が無駄になる！」

シャクローは默つて舵を彼方此方に動かしてゐた。

「始め！……」

彼がチェツクメニィを私の方に投たので小舟の底を匍匐ながら板を解いて、其上に頑固な服の袖を引張つて腰懸に据え、足に凭せ、他の袖と膝とを辛つと摑んだが、不意に結果が現はれて……舟は高く飛ぶかと思ふと急ぐ底く泡を立て馳けてゐた、突然私は水中に落た、左手にチェクメニィを握り、右手は舷の外側に長く垂れてゐた繩に括られながら、頭はザワ／＼鳴る波に打たれ、耳、口、鼻は水の中に壓迫けられたので、鹽辛ひ水を澤山呑むだ……堅く繩を卷付けて登らうとしたが、再び水中に落て頭を船の橫腹に衝當て、辛つと船の中に無罪を宣告された、而して私は倘一度自分で飛込んで試やうと思ふた、それは豫て覺悟をしてゐた十回の第一回だけは既に任務を果したからだ、向ふ側を見るとシャクローも同じく水中に落て、兩手で繩を堅く握つてゐた。

「僕は生活てゐる！」と私は叫びかけた。

此の瞬間に彼は水から高く飛んで、船の中に登り、私は彼を捕へて引摺り込み、同時に兩人は顏を見合せて互に思を交換した私は馬に乘つたやうに船に座り、鐙のやうに足を繩の中に踏込んだが――これは安全な席ではない、好きな波は苦もなく鞍を打越して來るのであつた、シャクローは兩手で膝を抱き、頭を私の胸に橫へた、私は彼の顎骨が震へてゐると思ふたがさうではなく全身が震へてゐたのだ、倘う一度水に飛込で繩にブラ垂れ、僕もお交際をするからと云ふと彼は答の代りに頭で私の胸を突いた、波は絕えず野蠻な舞踏を躍るので、兩人は懸命になつて堅く保つてゐたが、私の片足は繩に傷けられ、高い波の山は沙々と鳴つては消えて了ふのであつた、

私は前言つたとを繰返して命令的の句調で云ふと、シャクローは頭を强く私の胸に壓附けるので、私の體から彼の兩手を離して水中に衝込まうとすると、彼は堅く繩を摑んだので私の骨折は無益であつた、而して此夜に於いて何物よりも私を驚かしたのは彼の言葉であつた。

「君に僕を溺死させたいのか？」と私語いて私の顏を睨らんだ。

眞に驚いた！彼の聞には驚いた、驚いたる聞の音調！、怯懦な服從、容恕を乞ふ哀訴、希望を失ふ人間の最後の歎愁、彼の運命の終を逃れんとする哀願は、死人のやうな蒼白い顏や、潤んだ眼に現はれてゐた。

「强つかりし給へ！……」と云ふて私は繩を摑んで水中に躍り込むと何か足に觸れた初め入つた時は何も無いやうであつたが、何だらう、全く最初は何も足に觸れなかつた「陸だ！……」と私は叫んだ。

而して大航海者が陸を發見して叫んだやうに聽へた、確に叫んだ、此の聲に感覺を高められて、倘一度彼等が叫ぶであらうと思ふて耳を欹て注意した、シャクローも慟號して、兩人は水中に飛込んだが胸まで沈んだので急に惡寒を覺えた、乾いた岸の目標は明瞭り見えてゐる、此處に來ては波も力を失なつて凪ぎ、反つて兩人を乘せて滑るやうであつた。

兩人は小船の兩側に取附き、救助繩を堅つかり握つて、自然の境遇に據つて得た船を引摺ながら、運命に任せて無暗に前へ進んだ。

シャクローは何か呟いては笑ふので私も氣に懸るから四方を見廻したが眞暗で何物も見えない、波濤の音は吾等の脊後や右側に烈しく響き前方や左側は――靜、それで左側を進んだが、底は堅くて、砂もある、然し到處も一樣ではない、往々水が膝まで來るかと思ふと、直ぐ深くなつて足が底に達かない、片手に小船を捕へ、片手と片足で游がねばならなかつた、深くなるとシャクローは大きな聲で怒鳴る、私は怖れる、そこで兩人の間に焰が閃めくのであつた……

……

シャクローが大きな聲で怒鳴ると私は小船が市有財產であるとを思ひ出す、而して彼に注意しては互に氣を付けるのであつたが、二三分過つと彼は直ぐ忘れて、亦大きな聲で怒鳴る、それを鎭める私の痛歎は一通でなかつた。

水が漸々淺なつて……膝までになり……踝までになり……全く水が無なつた、兩人は市の船を引揚げやうとしたが、力が足りないので放棄らかして行くと、何か黑い樹の根のやうな物が道に橫はつてゐるので、それを飛越えると――裸足に草の刺を突立た、あゝ悲しや地には歡迎されす、食ふ物はなく、唯だ一ヴエルスト程隔つてゐる所に、火が喜ばしげに閃々燃えてゐるので其方に驅て行つた、四方は灰色の暗に覆はれて了つた……。

○編輯局だより

△眞に御暑くなりました、併し貧乏人の吾々は暑くも寒くも悠々閑居なぞと申す譯に參りません、此頃は早朝より汗ダラ／＼で馳け廻つて居ります、貧乏なる吾々は避暑に行くでは無し暑中休暇をする譯では無し貧乏暇無しの火の車に乘て居ては、滅却心頭火亦凉といふ樣な心地が致します。

△此暑さでは仲々に廣告は取れず、編輯も困難なり、とても無事に發行するとは出來まいと思ひ惱んで居りましたが、幸ひに讀者諸君の御援助によりて本號も無事に發行するの運びに至りました。（ひで）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小說

魔

モーパツサン 二葉庵覺非譯

六月二日

病狀は段々惡るくなるばかりだ、何うしたのか「ブロミード」はちつとも效能がない。灌水浴も亦何等の効驗を顯はさない。病氣で充分衰弱はして居るのだがそれにも拘らず或時は「ルマール」の森邊り迄も散歩してわざと勞れる事もある。勞れると眠り易い。

私は始めの間はこんな考へを持つて居た。溫かい美はしい太陽の光りに浴して草や木の葉の若々しい香りを帶びた軟かい大氣を呼吸して居れば自然と新鮮な血液は脈管に漲る樣になり心臟は新らしい活動力に充たされて來るだらうと。

私は暫らく森の中を逍遙いた後で大道に出た。間もなく又小路を辿つて「ブイーユ」の方へと足をむけた。此小路は所謂亭々たる大樹の根方に雜草を分けて僅かに通じてる位のものだからこれを辿つて行くと丁度靑葉の隧道を通る樣で空も何も無論少しも見えはしない。

突然と私は烈寒に襲はれた、だが決して寒むかつたのではない、只何となく恐ろしくて譯もなく震つたのだ。私は一時も早く此無氣味な森を拔け出さうと思つて歩調を早めた。こんなに無氣味な森の中に只一人きり居るのは堪らなく恐ろしい。何だか知らないが太古の樣な森の靜けさが馬鹿に恐ろしく思はれて氣も心も落ち付かない。不意に誰れかゞ私の後を附けて來る樣に感じた。而もそれが手がすれ／＼になる程近く尾行て來る樣に思はれる。水を注がれた樣にゾツとして同時に足は輕く頭ばかり重くなつた。

つと私は振り返へつて見て見たけれど勿論誰れも居樣筈はない。振り返へつて見た時に此坦々とした大道が一曲りもなく森の果迄見通うされて其間人の子一人居なかつたのには寂しさを通り越して恐ろしさが迫つて來た其上道路の兩側には天を摩する樣な喬樹が見渡たす限り枝を交はして被ひ重なつて居るから頗る陰氣な景色である。限りなき恐怖に打れて私は理由もなく目を閉ぢた猶豫もなく私は獨樂の如くに身を轉じて元來た道へと引き返へした。余り急に廻轉したので殆んど轉倒しようとして危ふく踏み止まつた、四邊の騷ぎに眼を開けて見るとアサ大變！。森の凡ての樹木は枝振り面白く踊り狂つて砂塵は舞ひ上りとても面を向けられない程だ。私は思はず知らず其處に蹲まつてしまつた。其後の事は全く知らない。只もう夢中になつて右手の方へ無暗矢鱈と突つ走つた、何んでも元來た道へと辿りに辿つた。

六月三日

恐ろしい夜を過した。私は二三週間外出して來ようと思ひ付いた。旅行して居ればこんな下らぬ事は確かに忘れて病氣も全快するに違ひないと思ふ。

七月二日

旅行から歸へつて來た。旅行をしてる中は萬事を忘れて居たから病氣も何時の間にか全然回復て居た。

旅行中私はセントミケル山の方へ行つた。私と同じ樣に暮れ方に『アヴランク』に到着いた人は素敵に立派な景色を見たゞろう。町は全部が丘の上にあるのだが私は到着と直ぐに町中で一番の高所にある公園に行つて見た。平凡ない公園だらうと思つて上つたが。來て見て驚ろいた。如何にも快哉を叫ばざるを得なかつた。

目屆きもしない程な入江が見晴されて氣も心も晴れ晴れとする、眼界をさへぎるものは只二つの小さな丘があるばかりである。晴れ渡つた夕陽の空色は黃金を流した樣で海水と空色との配合は賞讃の言葉以上である。此美はしき繪の中に只一つ小さな丘が砂地の中から突き立つて居る。夕陽を背にして居るので黑ずんだ山の形が一入鮮明な印象を與へて居た。太陽は丁度今しも沒んだ計りの處で靜かな夕暮れの空の中に其夢の樣な丘が輪廓鮮明に浮き出して見える。

其丘の上には一基の尖塔がスツキリと突つ立つて居る。ゴシツク風の尖塔は此時閑靜の平穩な景色に照應して殊更に敬神の念を呼び起す樣に思はれた。

夜の全く明け離れるをも待ち得ないで。私は此丘へやつて來た。

潮は昨夕の如に干潮であつた。頂上に上り詰めた處に思ひ掛けぬ見事な寺が建築て居たのには度膽を拔かれざるを得なかつた。彼方此方と逍遙いて居た處が廣大な岩層に出て來た。都市は全體此岩層の上に建築られて居るのだ。そして會堂の支配を受けて居るのだ。

峭道を攀ち上つてやつと大きな怪しげなゴシツク風の建築の中に入つて行つた。此大建築は地抵の爲めに建築てられたものなので非常に宏壯なものではあるが建築が舊式だけに天井が馬鹿に低くゝて見すぼらしいだが其廻廊の柱に至つては華麗を極めたものである。廻廊は大理石を以て敷き詰め直ぐに螺線形の梯子に依つて鐘樓に通じて居る。鐘樓の內部は正體も知れぬ化物や惡魔の像及び怪奇花の彫刻で裝飾られて目も眩む程である。內部は斯く立派だが外觀は頗る不格好を極めたものであつた。これが晝間は森嚴に夜間は暗黑の中にヌツとばかりに突つ立つて居るのだ。

頂上に上り詰めた時に案內の僧に聞て見た『なんとまあ神々しい建築ですね。神佛の有難味が身に滲みる樣ですが」

僧侶は案外に何とも感じては居なかつたらしい。

『非常な風ですね』と探つても付かぬ返事である。

濱を見下ろせば折からの滿潮で白砂の上を走る潮の面白く見られる。色々と談話の緒を引き出して居る中に僧は此地で有名な傳說樣の昔話を聞かせた、單に一つの傳說には過ぎないが私は大變な感興を以て聞いた。其大體はこうである。

夜分に此濱邊を逍遙いた事のある人は誰れでも乾度何者とも知らずヒソ／＼と話しながら砂濱を辿る者がある樣に思意はせられる。不思議にそんな考へを浮べさせられるそうである。で此時には又是非とも二匹の山羊が附屬もので交互に高く抵く鳴きかはして居る。生意氣盛の青年達は何それは海鳥の叫びに過ぎないと笑つてしまうけれど此叫びが時としては人間の唱きの如に聞こえる事もあると云ふ。

漁夫に至つては現に看て親しく一人の羊牧者に出會たとさへ吹聽する。で其時見た羊牧者は頭部から被布をして居たので顏は見えなかつたけれど濱邊をフラ／＼と逍遙つて結局の果てが潮流の中にづん／＼と入つて行つてしまつたそうだ。猶不審議な事には其時其羊牧者は男子の顏をした牡山羊と婦人の顏をした雌山羊とを曳いて居たと云ふ。で加之猶不審議な事は其二匹の山羊は純白で何だか變挺な言語を弄して絶え間なく喧嘩をやらやかし喧嘩を止めたかと思ふとお互に腹一杯の聲で唸り合つて居たと云ふ事だ。

『眞實ですか』と問ふて見た。

『どうもね』と答へる。

で重ねて私は問ふた。

『若し此世の中に我々人類以外の人類が居るとしてもそれが今迄知れずに居たと云ふ事が第一不審議ぢやないですか。又實際そんなものが居るのなら見られないと云ふのはちと變ですね」

と疊み掛けて質問に及んだ。僧は案外冷靜である。

『だつて君考へて見給へ。世界に存在するものは必ず見えなければならぬと云ふわけのものぢやない。先づ大氣を見給へ。こいつがどうかした動機で暴風にでもなりた時は家も小屋も吹き上げ、樹木を倒し海水を卷き上げ、其恐ろしい作力は殆んど想像以外だが而かし此大氣は今迄決して見た者はないだろう？而かし幾ら君だつて大氣の存在はまさか否定するわけには行かないだろうぢやないか」

私は此單純な理詰めにやり込められて閉口した。而かしこんな理屈なら私だつて疾くの昔に百も承知してるのだけれど。

七月三日

こいつ乾度又例の鬼面のお化けに取つ付かれたのだ。昨夜私は何んだか自分に寄つかゝつて來て居る邊から生血を吸ひ取る樣に感じた。そうだ。恰も蛭が血を吸ふ樣な工合にして私の頸から生血を吸ひ出して居たそんなこんなして苦しんで居る間に私が目を覺ましたら其奴も亦逃げてしまつた。だが此時の氣持つたら格別で此儘死亡かと思つた。この樣な怪事が二三日も續く樣だつたら又々何處かへ逃げ出なけやなるまい。

○山口義三君の消息（石川）

[illegible]

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

農家と理科（十二）

増田操

宋の林和靖の梅を愛せることは史上著名なることであるがそればかりでなく、またその風流心と經濟心と調和したるものもあつたとの異聞がある。或人の談に林和靖はその庭前屋後に三百六十五株の梅樹を栽へて彼の『疎影横斜水清淺』の狀を賞し、『暗香浮動月黄昏』の景を愛で一株の收穫を以て一日の家計の料に充て、三百六十餘株の梅實の成熟するを待つてこれを賣りその代價の總額を一年の日數に除しその高を一日の小遣ひ錢に充てしてと說郛に見ゆと、我が農家に於ても林氏の如く風流心と經濟心とを調和することを得たらんには甚だ調法なることであらふ、若し庭園に於ける美術上の趣味を害することなくんば林氏の故智を學び松檜などの庭樹に換ゆるに桃、梨、柿、栗、枇杷、葡萄、柑橘類などを撰み各々その嗜好に應じて目を慰め心を樂ましむるの外、果實にて一年中の生計を補ひ彼の松檜などの如く一年に二三回の手入を植木屋に賴むの世話も要らず己が丹誠を以て剪枝や施肥の手入を爲さば正に一擧兩得であるまいか。

人生快樂を得るの途、人心の適意如何に依り一定の標準あらずと雖ども人身の健康を以て人生無上の快樂とせねばなるまい、苟も人身の健康即ち肉體の健康と心靈の健全を得る程、快樂なるはない、そして肉體と心靈とは決して二途あるものでない、その强壯なる體軀の內には活潑なる精神を宿すと云ふでないか、その體軀の强壯を得るの途や多くありと雖とも果樹の栽培ほど人心に愉快を與へ身體をして强壯ならしむるものがあるまい。

果實は滋養分に富み胃を健にして消化を助け血液の循環を調和する効があると云へば常に新鮮なる果實をして食膳に配して疾病を豫防し且つ物質的社會の進步と共に生活もまた向上するに隨ひ一日も缺くべからざる必須品たるは論するまでもあるまい若し一度栽植すれば其樹の命數や數十年に及び、年々歲々二三回の施肥と手入を要するのみで其後每週二三回散步を兼ね果樹の下を逍遙し異狀あらば注意を加ふればよいのである。

其間に於て新鮮なる空氣を呼吸し得るのみならず己が栽へたる果樹が健全なる發芽を爲して成長の速かなるを見る時は恰も可憐なる愛子の成長するを見ると全じく頗る愉快を感ずるものである、それ春風駘蕩の候、園中の百花爛熳として幽香を放ては小禽歌ひ胡蝶の舞ひ遊ふの狀や一として人の目を樂しましめ春去り夏來れば早熟種の果實は既に熟して主人の丹精に酬ゆるが如くその採食を待ちつゝある。

樹下に坐を設け新鮮なる果實を味ふ時は風吹かさるも自から萬斛の凉味を覺りまた炎熱の苦を消し去るアゝ人生の快樂此上もないだらふ、夏も過ぎ秋冬の候に際せば樹間累々たる佳果を以て滿たさる、採收貯藏して不時の需を待つべく或は珍果に製し或は酒に釀して食卓に上せば賓客の唾涎を止めしめ若し剩餘ありて市場に出すあらばまた大に歡迎せられ財嚢時ならぬ黄金の花を咲かしむることもある。平素身體の健康を缺く人は剪枝、施肥、耕耘など肉體勞働を敢てせばその消化を助けて胃を健かにし日ならず强壯なる體軀となり併て爽快なる精神を鼓舞し平和なる幸福を領有するであらふ。

栽培者若し品質優良にして形狀正しく重量大にして、外觀美なる珍品を得んとならば、整枝果樹に依るの外はない、其整枝果樹はまた庭前屋後の裝飾となり物質的、精神的共に其利する所は頗る大である實に整枝果樹は不生產的空地を變じて黄金の地となし不自然的なる庭園を化して趣味津々湧くが如き美觀を呈するものであらふ、勿論果樹の種類と其地の狀態に依り整枝の形成法を異にせねばならぬ蜜柑、柿、枇杷などは自然形を可とするものであるから垣作りとなし得ない、また建物に沿ふて栽培することは出來ない、これに反して梨などは種々の形成法に依り得らるゝから地積の廣狹と場所の如何に依つて相當の樹形を作ることが出來る、故に土塀や建物に沿ふて果樹を栽植せんとするならば梨、桃、など直列形成、平列形成、鈎鬪形成、斜列形成が適當であらふ其他庭園の小面積を利用せんとならば梨、苹果などを圓錐形成に作り或は裝飾的に扇狀に整枝するも美的であらう又樹陰の空地を利用せんとするならば『スグリ』などを籬仕立とするも適當であらう、要するに栽植する土地を撰定するは勿論果樹の種類を撰みて栽培すべきは最も肝要である。

故山の風雨

奥田聰雨

（この消息は余に宛てたる私信なれども、彼が近況をうかゞひ知るに風竟の明顯なればと思ふまゝ、無斷にて茲に公表することゝはなしぬ　有香生）

一

『健全なる精神こそ健全なる肉體を造るものなれ』とは吾人の得たる幾多の經驗より歸納せる斷案なることを告白するに躊躇せぬ所である。而かも僕が宿痾未だ癒えざるは其原因健全なる精神を獲得して居らぬ所に胚胎するもので此の斷案を否定するに足る反證を擧げて餘地はない。所詮はあはれなるまどへる羇の子ならむ乎。

歸來症狀は一變して難治の脚氣症。

無智は純朴なる安心の基に相違ない、けれども又懷疑時代の煩悶を經て努力健鬪して後始めて鞏固なる安立の域に到達するとも亦事實であるならば僕の現在も無意義でなからう。

當今多くの學者（形而上學）の告白てふものは、恰も卵の時に奪ひ去られて竈の中で孵化せられ、飼養せられ、やがて天下最も美麗なりと呼ばるゝ師匠鳥といへるに、啼き方囀り方を敎へられたる鶯の聲にも似たらずや。その師匠鳥と呼ばるゝ鶯既に野生ならず、何ぞ純粹無雜の自然の美聲を囀り得む。況んや其他をや。彼等は自由を束縛せられたる擒たるをいかにせん。果然飼養せられたる鶯の聲はいやし。遊食の徒、狂喜して絕美の啼聲となし估價千金なりと誇る。笑ふに堪へたり。彼の徒は未だ曾て山里一聲の鶯を知らざるなり、知り得んや。

當今學者の多くは徒らに議論に疲れて內懷疑の念を包藏せり。彼等の疲れ方は道に忠誠至誠なる疲れ方にあらずして旨後的に餘儀なく疲れたり。何ぞ眞情の流露、至誠の告白あり得むや。彼等は生活難てふ四圍の敵に不斷に會せるを如何せむ。果然議論に詭話に其聲や奇也。流俗拍子して快と呼び妙と叫ぶも概ね皆時の相場のみ。彼等位階を僥倖し、糧貫に衣食するも心あるもの與するを慚づ。千金の鶯スリ餌に生くると甲乙あらむや。

三

頑鈍僕が如きは說を東西に聽き得る聽耳にあらず、清貧余か如きは學古今を極むるの資を有せず。僕が一生を通じて世に拗ねたれば足れり。煥々たる天上の星に憧憬すとも足地に着けるを如何せむ。唯一恃む所は勞働に堪ふへき體力即是れ、而かもこの病弱の身を以て何事を成し得むや。あゝ僕も亦貧弱者の犧牲！。

四

それ故郷はエライ人物の歸るへき所、相場師の歸るへき所、山師の歸るへき所、賭博師の歸るへき所也、純朴篤實なる神の國と稱へられたる田舍は、今や翕然として黃金の前に拜跪せり。田舍漢の理想的人物は金の持てる人物なり。盜賊であらうが、掏兒であらうが、欺詐師であらうが問ふ所にあらず、現代社會に橫流せる濁流に氣慨あり俠骨あり義憤ある者の歸るへき所にあらず。あゝ天柱をして灼熱たらしめ、地軸に天體の大塊をブツ付けざる限り、區々學者の絕叫も畢竟屁囊だに價せず。

五

思ひ起す、當年東都を去るの痛恨事を。再歸る勿れとは兄が眞情にてありけめ。再たび來らむとは僕が言質なりき。今日僕の上京の遲きを以て、兄が憂苦措かさる切情やうれし。然れども暫しの僕の爲す儘に放任せしめよ。白髮愛長き老母の餘命を省養するは子の道の凡てなるか。あゝ老母の溫情やつねにもろし、纏綿袖をひく弟妹の心根や弱くも又いぢらし。

歸來既に一歲、此間絕えし音信の疎情、兄乞ふ之を諒とせよ。僕筆を執らむとして感慨無量に堪へず、つひに筆を拋ちたる一再ならざりき。

言語不達の感想、拙筆の能くする所にあらず。不立文字……。あゝやみなむか、言語に絕し想像に絕せり。

六

香兄今健在なりや、兄も亦空閨寂寞の荒凉慘憺を嘗め盡したる茲に幾年ぞ、未だ娶らずや。

七

警子女史も嫁せり、沐佛兄も娶れり、甲去り乙來り茫々古昔の感。

沐佛兄彼女を迎へて未だ幾日ならず、僕急走其書齋を叩いて問うて曰く『樂しきや』沐佛之に和して曰く『イヤモー』

沐佛兄結婚後の所感と其告白とは此の單なる對話以外未だ聞かざる所、呵々

七

香兄別後生活の苦鬪いかばかりか察するに餘あり。あゝ兄が余に對する眞情の熱きに反して獸親冷酷なるこの無情漢の瘦せたる腕に細き烟の寡ろあはれと……。

八

時方に盛夏なり、兄が自愛と兄がホームの慰藉を得せしめられむことを禱る。

重ねて兄が家鄉の平和を禱る。

（七月廿日）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同窓

嘯生

鹽尻峠を越えたのは八月の末であつた。休暇中のこと、濃飛地方の高山を跋渉して此れから諏訪の方へ出る途中である。峠に佇立つて、來し方を振向いて見る、遠き國境の山脈は黒く長い、近い山々は走る雲の影になつて濃く薄く見えた。

行く方を眺めると、山に圍まれた諏訪一體の地が模型圖の如に展開されてある。光つて見える水は諏訪湖だと知れた。私がこれから訪ねて行く友の家は湖水の西方だと聞いたが何れが村だか見えさうも無い。

友といふのは中學の同窓で、と云つても僕が一年生の時其の人は確か五年生だつたと記臆する、或は先方では忘れて居るかも知れない。名は津山一郎と云つた。何しても今から數へると六年にも成る。稀々と懐舊の情を胸にして峠を下つた。

僕の中學校へ入つた頃、上級生の羽振の素晴しかつたこと。白い袴に黒い袴、痩せた肩も太つた肩も皆な風を切つて歩いて居る。タオルを腰にぶら下るのが流行つた。

僕達は立縞の小倉袴をシャンと穿いて、制帽を前下りに、上級生には大丈夫一間は遠ざかつて歩いたもの。それで居て買物のお使となると先を爭つたものだ。更に角、上級に對しては忠義立を等閑にした覺は無い。僕は寄宿舍に居たが、舍中での勢力家は津山さん（習慣上、君と云へない）だつた。成績、體格、氣骨の三拍子揃ひと來てるから、それは隨分と人望のあつたものだ。色の黒い、凄い眼附のした、腕を組んで歩くのが癖らしい。本を懐にするのも癖だつた。

忘れもしない、始めて賄征伐といふ妙味を覺えた時の事だ、津山さんは總司令官といふ株で、秘かに舍生一同を集めて作戰計畫の演說をした。若い僕達は、半分は好奇心、半分は恐怖心といふ柄で大贊成、腕を扼して前途の活劇を豫想して居つた。而して此時から津山さんは偉い人だと腦に浸み込んで了つた。

『諸君……青年に元氣が無くては駄目だ服從といふ事は要するに程度問題で、僕は絶對の服從は吾々に取つて大なる恥辱だと思ふ』なんて流の激烈な口吻が甚く氣に入つた。

處で、例の畫策が舍監に漏れたとかで、其の晩、津山さんは舍監室に呼ばれる、大分雲行が荒くなつた、障子の陰で聞いて居ると、先生を相手に大議論をして居るんだ。

△△先生などは何うやら一本參つたらしい形勢だつたが、追ひ拂はれて室に逃げ歸つたから、後の事は知らない。只だ、宣戰の布告が撤回されたのは事實で、翌朝から食物が良くて、賄の待遇が改まつた。僕達も遠慮なく物を言附てやつた。

何んでも其れと前後して、五年級全體のストライキがあつて、張本人は矢張、津山さんと聞いたが、何うして落着したか知らぬ。

舍でよく茶話會が在る、花役は勿論津山さんだ。其の演說が好い。鋭い語調、堂々たる態度、實に立派なもの。慷慨あり時に滑稽あり、從つて法螺も中々吐いた。大氣焔を起して天下の輿論を左右するんだとは可く聞かされる文句。聞く度に小さい胸を躍して居た。又た、詩吟が上手で、東湖の正氣之歌が八十番と覺えた。

卒業の際は兎に角三番といふ上席で出た其の時の事だ『立てよ青年』といふ演題で得意の快辯を振つた。拍手の間に一時間の長廣舌、高堂は破れんばかりに轟めいた。濟むと其の晩、僕達はお祝だと云つて、夏密柑だの煎餅だの、中には稻荷壽しなどを持ち寄つて盛に慰勞の宴を張つたのを覺えて居る。相變らず大氣焔を浴せられて譯も無く感じ入つたものさ。

。　。　。　。　●

爾來杳として消息は無いが、今は如何して居るだろ、早く會つてみたいな、實に懐しい人だ、と思ひつゝ漸つとのこと下諏訪の町まで下り着いた。

汽車が上諏訪に着いたのは三時頃、車よりは徒步の方が便利だと聞いて、幾つかの細い橋を渡つたり、落込みさうな田の畔を踏んで△△村を訪ねて行つた。村は八十か九十戸、精々見積つて百といふ家數、大きな山門のお寺もある。

村の入口の乾物屋で尋くと家は直ぐ知れた。杉圍ひの可成大きな茅葺があつて、其處から右に折れた細徑の上に粉で小麗いに葺いた家が在る。此の家だ。

聲を懸ける、子守らしいのが取次いだ。名刺を出して、旅行の途次に一寸お立寄しましたと來意を云ふ。聲を聞いたのか、直ぐ出て來た人がある。見違ひしさうだが、矢張津山さんだつた。

『突然御伺ひをしました、僕は角田で…』と丁寧に挨拶をした。

『あ……角田君ですか……』と會釋して呑み込めた容子である。

上つて平素の無沙汰を謝した『否、私の方でも如何も失禮勝でした』と丁寧に云つて呉れる。

其れから僕は旅行中の談を二つ三つして『君も學校に居た時分は隨分お好きの如でしたが此頃も相變らずですか』

『如何して、此頃は駄目です、暇が無し、Mも無しで、へ、、、』と恁那ことを云ふ。

その中に襖が開いて、女の人が茶と菓子とを持て來られた田舍には珍らしい美いな婦人で、髮も銀杏返しに結つて居る。年には疎過ぎると思はれる絣が特に目に立つ。

『可くおいでなんして……』と僕に挨拶をせられる、僕も周章てゝ座り易へて丁調に述べた。すると、

次の間で、小兒が泣き出す。それを宥す聲も聞へる、先の子守らしい。

『負ふつて外へ遊びに遣よ』と小聲で津山さんが婦人に云ふ。直ぐあちらへ行つた。言葉の容子で細君とも見える。確實ではないが。

注いで貰つた茶を飲みながら、僕は何かと話の端緒を引き出さうとするが、下手な上に津山さんも餘り以前のやうにも無い。當も無い世間話を掛けられて、僕なとは調子を合すのに困つて了つた。何しろ變つたものだ、若々しい血色は褪せて、眼が沈んで居る。鼻下に蓄へた髯は申し分け程に伸びて何うしても温厚な若主人とよりは取れない。喫はなかつた烟草もこの頃はいけると見えて煙管もある。

『一寸、甘郎、反物屋が來ましたに』と云つて外の婦人が津山さんを呼びに來た。

『今日は斷はれないかね』と眼で相圖をする。

『でも、折角來たもの、それに此間の話の、あれも、恰度可いにね』

『仕方が無いな、では君一寸失禮しますよ』と津山さんは立つた。

膝を崩して僕は室の中を見廻す、先づ机が一脚ある。一束の習字草紙も置いてある何れ小學校のだらうが。鴨居に帽子もあるがこれも正敎員の帽らしい。

『如何しやして旦那、高い事お有りましねえ』

『兎に角、尺で一パイとして如何だ』

『そんな事つては先生、元が切れますしや元が、へゝゝ』と推問答の話聲が漏れて來る

至々、世帶臭くなつたなと思ひながら、机の上に在つた『倫理敎育』といふ誰かの飜譯ものらしい本をあちこち開けながら讀んで居た。津山さんが此んな本を讀み出したかなと思つて老い行く人の昔の面影が偲ばれた。

。　。　。　。　●

夕飯に鯉を肴に酒が出た。僕は無理にすゝめられて相手になつた。好い加減に止して飯にしたが、津山さんはチビ〳〵と晩くまでも飲つて居る、七八合は大丈夫だとのこと。然し氣焔も一向に上りさうにも無い眞から好きと見えて、飲み口が素人で無い。

二三日お邪魔する都合だつたが、次の朝歸ることにした。（了）

○手紙片々

△西川文子氏より（二十六日附）　在京中は一方ならぬ御厚情にあづかり、誠にありがたく存じ申候、私二十三日の夜汽車にて無事歸國いたし申候、誠に心地よく暮し居候間、何卒御安心下され度候

△田中正造翁より（七月九日附谷中村出）　病氣で一昏疲勞と風邪位ではあろけれども…證動力以前の十分の二三に減じ之に困り、自然御はなしにもならぬ欠禮になりました。

△岡千代彦氏より（廿五日附巣鴨獄出）　本年五月十三日一ヶ年半の判決を受け、上告中の處、去る四日突然保釋を取消され全十七日收監と相成り、茲に愈々服從することゝ相成候、全事件は既に法理を離れて感情的と相成候事は汎く社會の認識する處に候得ば此上は獄則を嚴守して無事出獄する覺悟に御座候。

△伊藤證信氏より（山口廿三日出）　どうも社會主義者一部の行動誤る解し難きもののあるは何故に候や、アゝ血氣にはやる輩では折角の大主義も誤解のうちに葬られはせずや、今少し主義の爲め自重こそ願はしく存候へ

△岩崎革也氏より（丹波十一日附）　御事業愈佳境に進み、專ら御奮闘の由袋手を揚げて祝します、老後と申す晩年さか、いつも讀過の高文は仲々不似合にて、壯年の意氣勃々たるものと推想いたし遙かに女史が前途の多幸さ多福な祈り居ます。

△小池翠峰氏より（信州諏訪九日出）　小生義今般東京社會新聞の「チラシ」事件より端なくも警察の知る所さなりて治安に害さかにて入日〔illegible〕に捕り始末迄も取り上げられました、神川さん等の事件も御察し申します苦心惨憺たる御盡力御察し申します。

△遠藤友四郎氏より（高崎七日出）　「東北評論」は保證金がなかつたので第一號は禁止でしたが、こん度は輦下の青年同志が三四人で保證金の外に第二號の印刷費及第三種認可料まで調達して與れましたから八月一日以て發行の手續に致しました。

△宮崎滔天氏より（廿四日小石川出）　事によるさ雲南雜誌も當處を發行處に願ふでしよふ、之も御許しなて願ひます、若し手紙でも參りましたらば左の通り附箋して御廻はしな願ひます、誠に御多忙中恐入りますが、是も革命變様の餘業さ御觀念被下候て面倒な見てやつて下さい。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

本館
ライオン歯磨發賣元
東京神田柳原川岸　小林富次郎

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の肌には殊に効驗著し

定價　大瓶廿五錢　瓶入十五錢　袋入五錢　小袋三錢　鑵入十三錢

露國アンドレーフ著
新譯　血笑記
日本長谷川二葉亭譯

定價八十錢
郵税金八錢

日本文學にとつては全然新趣なもの、世界文壇に於ても全く創新なもの、象徴的にして併も神秘的なる本書は自然主義全盛の明治四十一年の文壇にとつては掀天動地の一大爆裂彈である

東京麹町區飯田町　易風社　振替一二三〇四番

伊豆三島　花島煉乳場製　名誉ある　金鶏ミルク

東京市日本橋區大傳馬町
發賣元　逸見山陽堂

▲書店廣告▼
●聖書其他基督教書籍を正直廉價を以て販賣仕候
神田區駿河臺西紅梅町十二　中庸堂

新装したる
東北評論　毎月一回一日發行　一部郵税共金四錢
第二號八月一日發行
上毛高崎市柳川町十二番地　東北評論社

●七寶側御婦人用時計

●第壹號　正價金拾圓也
七寶側十三形片硝子器械ヨルゲンシリンドル石入龍頭卷裏面体蓋上圖ノ如シ

●第貳號　正價金八圓半
七寶側十三形片硝子器械ヨルゲンシリンドル石入龍頭卷裏面体蓋上圖ノ如シ

●第參號　正價金七圓半
七寶側十三形片硝子器械ヨルゲンシリンドル石入龍頭卷裏面体蓋上圖ノ如シ

以上裏面七寶（赤）（紫）（萌黄）（淺黄）等ノ各種同價又盤面文字羅馬數字亞剌比亞數字共同價ノ事
◎市外送料金拾貳錢
東京市京橋區尾張町貳丁目振替貯金口座五九六六
時計及寶玉類内外
貴金屬美術品　商　天賞堂本店
電話新橋特三三三三、三一五三
電話（本七三三）　天賞堂大坂出張所
電話（本二六〇）　天賞堂神田出張所
電話（八七六）　天賞堂横濱出張所
電話（二二九）　天賞堂長崎出張所

木下尚江君新作・戸張孤雁君口繪・洋装美本
小説　乞食
定價卅五錢　送料六錢

●宗教道德は軍政の奴婢となり果てぬ世は沙漠の如く人は迷羊に似たり曰く社會主義曰く無政府主義曰く自然主義何れか時代苦悶の絶叫に非ざる悲哉靈光一閃を盲す衆心野を望んで預言者の聲を待つと切「乞食」は即ち著者が新轎の點滴なり

發兌　東京本郷弓町　昭文堂

●歯科治療●
自午前八時　至午後六時
歯科醫　吉瀬才市郎
東京神田須田町二十六番地
●學生勞働者諸君に限り藥價手術料共半額
●晝間執業者の便を計り夜間十時迄治療仕候

涙紅醫院長
醫士　一瀬鷹一
一、院　日本橋區蠣殻町二丁目十四番地
二、院　神田區連雀町十八番地
學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又ハ無料

ローヤル水ハ最モ高等ナル最モ進歩セル最モ名譽アル化粧水ナリ
定價　拾錢　拾五錢　廿五錢

ローヤル白粉ハ最モ改良セル最モ優等ナル無害ナル白粉ナリ
定價　拾錢　拾五錢　五拾錢

發賣元　東京銀座壹丁目　つやぶきん　佐々木商店

◎定價
▲一部六錢●十部五十五錢●二十部壹圓
▲申込は總て前金の事
發行兼編輯人　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地　神崎順一
印刷人　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地　遠藤友四郎
發行所　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地　世界婦人社
印刷所　東京市神田區美土代町三十四番地　博興堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY